

# 楽浪・帯方郡塼室墓の再検討

## 塼室墓の分類・編年・および諸問題の考察

A Re-examination of Brick Chamber Tombs in the Nangnang and Daebang  
Commanderies: A Study of the Classifications and Chronology of Brick  
Chamber Tombs and Issues

### 高久健二

TAKAKU Kenji

はじめに

① 塼室墓の分類と編年

② 塼併用木槨墓と塼室墓の関係について

③ 塼室墓・石材天井塼室墓・横穴式石室墓の関係について

④ 塼室墓の系譜

⑤ 塼室墓の出現と消滅の背景

おわりに

#### 【論文要旨】

朝鮮民主主義人民共和国の平壤・黄海道地域に分布する楽浪・帯方郡の塼室墓について、型式分類と編年を行い、関連墓制との関係、系譜、および出現・消滅の背景について考察した。その結果、楽浪塼室墓の主流をなす穹窿式塼天井単室塼室墓については、四型式に分類・編年し、実年代を推定した。さらに、諸属性の共有関係からその他の塼室墓との併行関係を明らかにした。これらの変遷過程をみると、穹窿式塼天井単室塼室墓1BⅡ型式が成立・普及する2世紀後葉～3世紀前葉に大きな画期があり、その背景としては公孫氏による楽浪郡の支配と帯方郡の分置を想定した。これらの系譜については、中国東北における漢墓資料との比較検討の結果、典型的な穹窿式塼天井塼室墓は、とくに遼東半島とのつながりが強いことを指摘した。

塼併用木槨墓については、木槨墓から塼室墓へと変化する過渡的な墓制ではなく、塼室墓の要素が木槨墓に導入された墓制であることを指摘した。これに基づいて塼併用木槨墓が造営された1世紀後葉～2世紀前葉に、すでに塼室墓が出現していたのではないかという仮説を提示した。

石材天井塼室墓と横穴式石室墓については、いずれも穹窿式塼天井塼室墓と併行して造営された墓制であり、とくに石材天井塼室墓は塼天井塼室墓から横穴式石室墓への過渡的な墓制ではなく、横穴式石室墓の天井形態が塼天井塼室墓に導入されたものと考えた。さらに、これまで不明確であった楽浪・帯方郡末期～滅亡後の状況について、穹窿式塼天井塼室墓・石材天井塼室墓・横穴式石室墓の分布状況や銘文資料などから検討した結果、3世紀中葉以降は平壤地域から黄海道地域へ在地豪族が移動し、これに代わって平壤地域へ新興勢力が流入しており、郡県体制が大きく変容していった時期であることを明らかにした。

【キーワード】 楽浪郡、帯方郡、塼室墓、横穴式石室

## はじめに

楽浪郡の中心地であった朝鮮民主主義人民共和国（以下、朝鮮と略す）の平壤地域、および後に帯方郡として分離する黄海道地域には当時の古墳が多数分布する。このうち楽浪郡後期および帯方郡時期の主流をなす墓制が塼室墓である。これまで発掘調査された塼室墓は解放前が約50基、解放後が約850基であり、総数は900基を超えるものと推定される。とくに、1980年代後半～1990年代初頭には平壤地域において二千数百基にのぼる楽浪古墳が発掘調査され、その中には多数の塼室墓が含まれている。近年、朝鮮側から楽浪古墳に関する研究書が刊行され、それらの調査概要が明らかにされつつある〔リスンジン 1997〕。一方、日帝時代の調査資料の一部が梅原考古資料として財団法人東洋文庫に保管されている〔東洋学術協会 1966, 東洋文庫古代史研究委員会 1989〕。この中には、1930～1940年代に朝鮮古跡研究会によって調査された塼室墓の未報告資料が多数含まれている。本稿では近年入手できた梅原考古資料と朝鮮側の新資料を用いて、まず塼室墓の分類・編年を行い、これらをもとにして、塼併用木槨墓や横穴式石室墓など関連墓制との関係、系譜、および塼室墓の出現・消滅の背景について検討する。

1909年に平安南道大同郡大同江面（現・平壤市楽浪区域）で初めて楽浪塼室墓が調査されて以来、約100年にわたって研究が行われてきた。<sup>(1)</sup>これまでの研究では、主として塼室墓の分類と編年、系譜論、その他の墓制との関連などについて検討されてきた。その結果、現在までのところ、塼室墓が木槨墓より後出する墓制である点、塼室墓の出現時期を2世紀代とする点、楽浪地域の墓制は最終的に横穴式石室墓へと移行していく点、塼室墓から横穴式石室墓へと移行する過程において、石材天井塼室墓が造営されている点では意見がほぼ一致しているといえる。その一方で、いまだ未解決の問題も多く残されている。まず、朝鮮側が提示している分類・編年案は、単室墓、二室墓、耳室墓に三分類し、それらを副葬品のセット関係によって細分したものであり、必ずしも塼室墓の形態の変化から導き出されたものではない。また、これらの分類の妥当性についても、未報告資料が多いため、検証できない状況にある。塼室墓の出現年代については、おおむね2世紀代という点では一致しているが、典型的な穹窿式塼天井塼室墓の出現時期を2世紀前半とするか後半とするかで意見が分かれる。さらに、塼室墓と同様に塼を用いた墓制である塼併用木槨墓の位置づけや、石材天井塼室墓・横穴式石室墓の出現時期などについても、明らかになっていない点が多い。これらを解明するためには、まず、塼室墓の形態に基づく型式分類を行い、その変遷過程を明らかにした上で、木槨墓や横穴式石室墓など関連墓制との時期的な併行関係および系譜関係を解明することが必要である。

## ①……………塼室墓の分類と編年

### (1) 塼室墓の型式分類

楽浪郡の塼室墓は実心長方塼を用いて墓室の主要部分を構築し、横穴式構造をもつ点が特徴であ

<sup>(2)</sup> 埴室墓はまず主要墓室数によって、単室墓（1類）と二室墓（2類）に大別できる。単室墓は玄室に直接羨道が付くものであり、耳室をもつものもみられる。これらはさらに天井形態によって木材天井単室埴室墓（1A類）、穹窿式埴天井単室埴室墓（1B類）、石材天井単室埴室墓（1C類）に細分できる。木材天井単室埴室墓は玄室の床面と四壁を埴で構築し、天井に木材を横架するもので、壁面は直線的ではほぼ垂直に埴を積み上げている。これまで石巖里218号墳（図5-1）と大同江面甲墳が知られているが、その構造を把握できるものは前者のみである。<sup>(3)</sup> 穹窿式埴天井単室埴室墓は玄室の床面・四壁・天井を埴で構築するもので、天井形態が穹窿式を呈する点が特徴である。これまで数百基が調査されており、楽浪埴室墓の大多数を占めるものと推定される。石材天井単室埴室墓は玄室の床面と四壁を埴で構築し、天井に板石を横架するものである。これまで、平壤駅前永和九年銘埴出土古墳（図6-6）、勝利洞3号墳、梨川里1号墳、鳳凰里1号墳、路岩里古墳（図6-5）などが報告されている。

二室墓は前室と後室からなり、前室側に羨道をもち、前室と後室の間には通路が設けられている。二室墓についても天井形態によって、木材天井二室埴室墓（2A類）と穹窿式埴天井二室埴室墓（2B類）に分けられる。まず、木材天井二室埴室墓は前室と後室の床面と壁面を埴で構築し、天井に木材を掛け渡すもので、墓室平面形がT字形を呈するものが多い。壁面は胴張りをもたず、垂直に立ち上がる。これまで貞梧洞39号墳、南寺里17号墳、土城洞335・336・337・338・339・340・472号墳、石巖里120号墳（図7-1）などが知られているが、詳細を把握できるものは石巖里120号墳のみである。<sup>(4)</sup> 穹窿式埴天井二室埴室墓は前室・後室の床面・壁面・天井を埴で構築し、天井が穹窿状を呈する。耳室は前室に付くものが大部分であるが、羨道に付くものもみられる。前室と後室の平面形によって、以下のような三類型に細分できる。

2Ba類：後室より前室の幅が広く平面形がT字形を呈するもので、土城洞45号墳（図7-2）、貞柏里219・227号墳、徳星里1号墳などが該当する。

2Bb類：前室と後室の幅が同じで、前室が長方形、後室が方形を呈するものである。石巖里204号墳（図7-4）、石巖洞古墳（図7-3）などが該当する。

2Bc類：前室と後室の幅が同じで、いずれも方形を呈するものである。貞柏里1号墳（図7-5）、南井里53号墳、南寺里2・29号墳（図7-7）、養洞里3号墳（図7-6）などが該当する。

以上のような楽浪郡の埴室墓のうち、主流を成すものは穹窿式埴天井単室埴室墓（1B類）であり、調査件数も他の埴室墓に比べて圧倒的に多い。また、木材天井埴室墓は楽浪埴室墓のなかでは少数派であり、調査例も少ない。二室墓については調査例こそ多いものの、正式に報告されているものが少なく、いまだ型式分類を行うには不十分な状況である。したがって、まず資料数の多い穹窿式埴天井単室埴室墓（1B類）について、その諸属性から型式分類を行い、次にそれらの諸属性の共通性等から他の埴室墓との併行関係を推定するという手法をとることとする。

型式分類に用いる属性としては、とくに時期差を示すと予想される羨道形態〔洪濬植 1993, 高久 1994〕、墓室平面形、羨道位置を取り上げることにする。また、これらと合わせて、墓室長、墓室幅、羨道長などの計測的属性も使用する。まず、羨道形態については上部に楣石を横架するもの（a類）、楣石の代わりに板材を掛け渡し、その上に埴を積み上げるもの（b類）、埴のみで構築するもの（c類）に大別できる。これらはさらにアーチ形架構の数や羨道の長さによって以下のように細分する

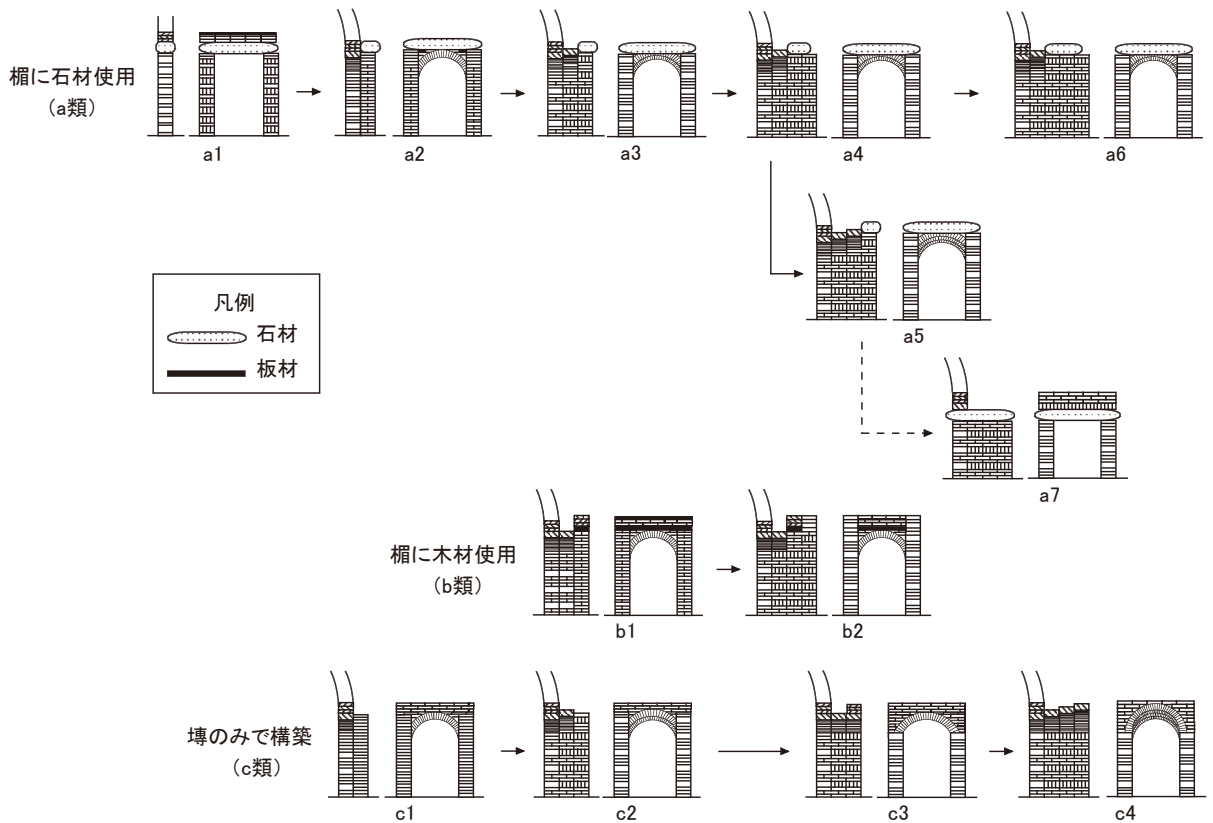


図1 羨道部の形態分類

ことができる (図1)。

**a類**

- a1: 玄門上部に楣石を掛け渡し、アーチ形架構や磚積羨道を持たないもの。
- a2: 玄門上部にアーチ形架構があり、短い磚積羨道上部に楣石を横架するもの。
- a3: 玄門上部と羨道1列目にアーチ形架構があり、その先の磚積羨道上部に楣石を横架するもの。
- a4: a3と同じ構造で、羨道先端の長さが磚1列分ほど長いもの。
- a5: 玄門上部と羨道1・2列目にアーチ形架構があり、その先の磚積羨道上部に楣石を横架するもの。
- a6: a3と同じ構造で、羨道先端の長さが磚2列分ほど長いもの。
- a7: 玄門および羨道1～3列目上部に石材を横架するもの。

**b類**

- b1: 玄門上部と羨道1列目にアーチ形架構があり、その先の磚積羨道上部に板材を横架するもの。
- b2: b1の先端に磚積壁が付くもの。

**c類**

- c1: 玄門上部にアーチ形架構があり、その先に短い磚積壁が付くもの。
- c2: 玄門上部と羨道1列目にアーチ形架構があり、その先に磚積壁が付くもの。
- c3: 玄門上部と羨道1・2列目にアーチ形架構があるもの。

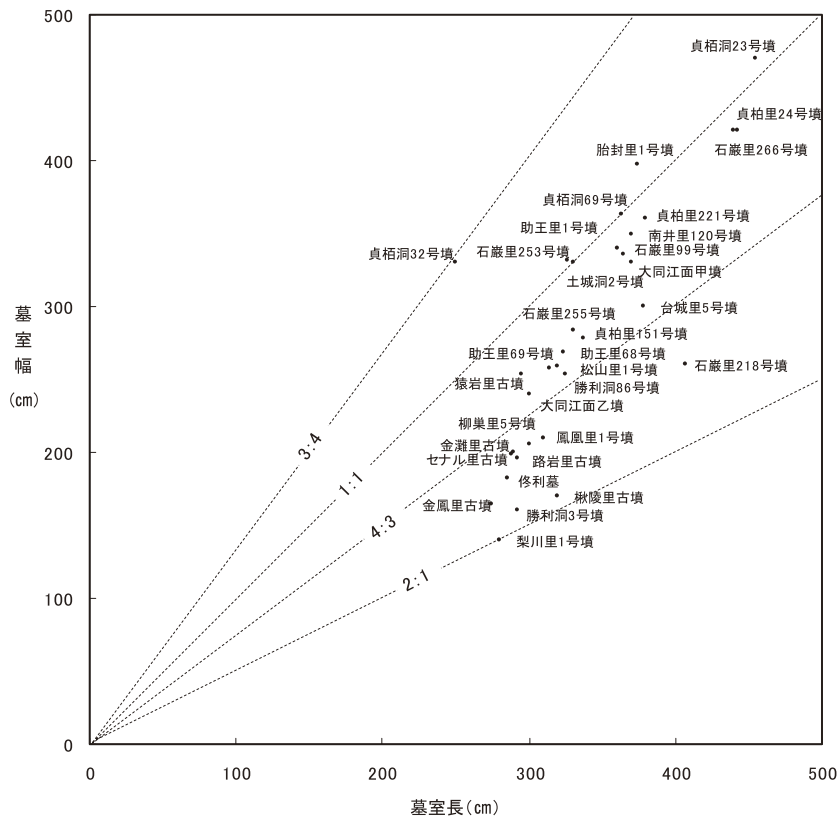


図2 単室埴室墓の墓室長幅比グラフ

c4：玄門上部と羨道1～3列目にアーチ形架構があるもの。

アーチ形架構の数と羨道長を基準とすれば、a2-c1, a3-b1-c2, a4-b2がそれぞれ併行関係にあるものと推定される。a5の羨道長はa4と同じであるが、アーチ形架構が1列多いので、a4よりもやや発展した形態といえる。c3は3列のアーチ形架構をもつことからみて、a5と併行し、c4は4列のアーチ形架構をもち、c3をより発展させた形であるので、a6と併行するものと考えられる。a7は路岩里古墳のみであり、特異な構造に属する可能性もあるが、羨道の長さはおおむねa4～a5と類似し、大型の楣石を横架するという点はa6と共通する。

次に単室埴室墓の平面形については、正方形と長方形がある。図2のように墓室長と墓室幅をグラフに示してみると、墓室長：墓室幅はおおむね3：4～2：1に収まることがわかる。ここで墓室長：墓室幅=3：4～4：3のものを正方形、4：3～2：1のものを長方形とする。

羨道位置については両袖と片袖のものがみられる。両袖の場合、壁面のほぼ中央に羨道が付くもの、墓室内より羨道側を向いて中央よりやや左寄りに付くもの、やや右寄りに付くものの3種が存在する。片袖の場合は、墓室内より羨道側を向いて左端に付くものと右端に付くものがみられるが、前者の方が多い。

以上、3つの主要属性以外に凹凸埴使用の有無、壁面と床面の構築形態、壁面における胴張の有無、耳室数、漆喰の使用なども型式分類において考慮する。まず、凹凸埴（柄付埴・子母埴）は長方形

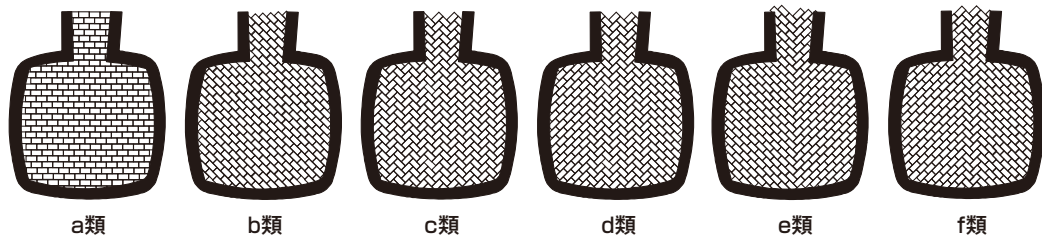


図3 墓室床面の構築方法

の磚の片方の小口面に凸部を、もう片方の小口面に凹部を作り出したもので、磚積みの際はこれら凸部と凹部を連結させて並べる。これらは磚を直線状に並べる際に用いられるものであるので、曲線状の強い胴張を有する壁面の構築には普通用いられない。また、小口面には凹凸が作り出されているので、この面には文様が付けられない。したがって、小口立積の壁面構築法や網代組の床面構築法には適さないものといつてよい。直線的な壁面、平行敷の床面、棺台の構築などに使用される場合が多い。

壁面の構築方法については、平積3段と立積1段を繰り返す工法が最も多く用いられているが、立積と併用される平積には1段から5段までが認められる。また、壁面をすべて平積で構築するものも存在する。床面の構築方法には、図3のように、主軸に沿って平行に磚を敷き並べるもの(a類)、主軸と斜め方向に磚を敷くもの(b類)、網代形に磚を敷くもの(c類)、墓室の左右部分は主軸と斜め方向に磚を敷き並べ、中央部分のみ網代形に敷くもの(d類)、V字形に磚を敷くもの(e類)、墓室の左右部分は主軸と斜め方向に磚を敷き並べ、中央部分のみV字形に磚を配置するもの(f類)などがみられる。このうち最も多く認められるものはd類であり、次にb類が続く。b・d・e・f類はいずれも左右対称に磚が敷き並べられているが、これは墓室の中央部分から両側へと磚を敷いていったためと考えられる。前室の両側に配置された耳室の場合はc類が多い。

楽浪磚室墓の壁面形態には直線的なもの、曲線的な胴張を有するものがあるが、後者が大多数を占め、前者はごく少数である。中国の漢墓の例をみると、後漢後期以降の磚室墓に胴張工法が認められることから、一般的には壁面が直線的なものから胴張を持つものへという変化が想定される。

耳室をもつものは穹窿式磚天井磚室墓にほぼ限られ、単室墓の場合は耳室が1室、二室墓の場合は耳室が1室あるいは2室のものがある。中国の漢墓のように3室以上の耳室をもつ多室墓はみられない。耳室の位置については、単室墓の場合は玄室の横や後方に、二室墓の場合は前室の横に付く場合が多いが、南寺里15号墳や土城洞54号墳のように羨道に耳室が付くものもみられる。耳室の有無は時期差を示す属性というよりは、被葬者の階層差を反映するものである可能性が高い[田村1993]。

最後に漆喰の使用については、磚と磚の隙間に漆喰をつめて補強するものと、墓室や羨道の壁面に塗布するものがある。漆喰の塗布は高句麗の壁画古墳など後世の古墳にみられる要素であることから、後出する属性であると考えられる。また、文様磚を用いて構築した壁面に漆喰を塗布すれば、当然、磚の文様は見えなくなってしまう。したがって、文様磚の使用と漆喰の塗布はお互い排他的な関係にある属性といえる。

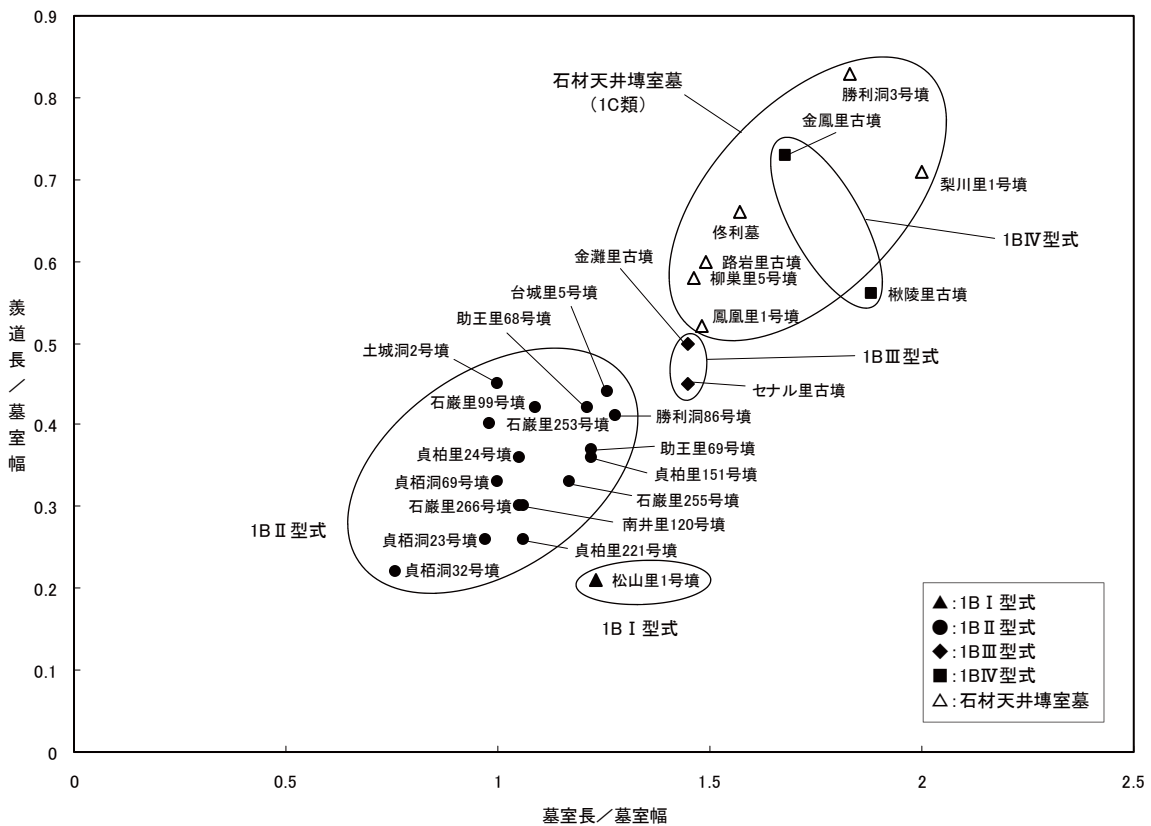


図4 単室埴室墓の墓室長/墓室幅×羨道長/墓室幅グラフ

次に、これら諸属性の組合せから穹窿式埴天井単室埴室墓(1B類)の型式分類を行う(表1)。まず、1B I 型式は羨道形態が  $a1 \cdot a2 \cdot c1$  のように短く、墓室平面形が正方形を呈し、両袖羨道をもつものである。胴張をもつ壁面は埴を平積みし、床面の埴敷は a 類で、凹凸埴を使用する。松山里 1 号墳(図5-2)のみであるが、穹窿式埴天井単室埴室墓のなかでは、最も古式のものと考えられる。

1B II 型式は羨道形態が  $a3 \sim a6 \cdot b1 \cdot b2 \cdot c2 \cdot c3$  で、墓室平面形が正方形を呈する。羨道は両袖で、左寄りと中央のものがあるが、右寄りのものは少ない。壁面は胴張りを有し、平積3段と立積1段を繰り返して構築するものが多い。床面の埴敷は  $c \cdot d \cdot e \cdot f$  類であり、凹凸埴を使用しないものが現れる。1B II 型式のなかでも羨道形態が  $b1$  の貞柏里 221 号墳(図5-3)や  $c2$  の南井里 120 号墳は古段階に属するものと推定される。また、1B II 型式には貞栢洞 32・23 号墳、助王里 1 号墳のように耳室を 1 個もつものが存在する(1B II-1 型式)。1B II 型式は楽浪郡の埴室墓の主体を占めており、埴室墓の最盛期の型式といえる。

1B III 型式は羨道形態  $c3$  で、墓室平面形が長方形を呈するものである。羨道は両袖であるが、幅の狭い短壁の左寄りに設置されているので、片袖に近くなっている。壁面は側壁や奥壁が胴張りを有し、平積3段と立積1段で積み上げられている。床面の埴敷は c 類である。凹凸埴はほぼ使用されなくなる。セナル里古墳(図6-2)のように耳室をもつものもみられる(1B III-1 型式)。1B II 型式に比べて、墓室が小型化し、古墳数も平壤地域では明らかに減少している。

1B IV 型式は羨道形態が不明であるが、平面形が長方形を呈し、片袖羨道をもつものである。羨

表 1 樂浪·帶方郡單室磚室墓屬性表 (●:有, ▲:不確定)

古墳名	型式・類型	墓室長 (cm)	墓室幅 (cm)	墓室長/ 墓室幅	羨道長 (cm)	羨道長/ 墓室幅	羨道形態													
							a1	a2	c1	a3	b1	c2	a4	a5	b2	c3	a6	c4	a7	
木材天井單室磚室墓(1A 類)																				
石巖里 218 号墳	1A	407	260	1.57	68	0.26		●												
大同江面甲墳	1A	370	330	1.12	不明	不明	不明													
穹窿式磚天井單室磚室墓(1B 類)																				
松山里 1 号墳	1B I	319	259	1.23	54	0.21			●											
貞柏里 221 号墳	1B II 古	380	360	1.06	93	0.26				●										
南井里 120 号墳	1B II 古	370	350	1.06	106	0.3				●										
勝利洞 86 号墳	1B II 古?	325	254	1.28	105	0.41					▲									
貞栢洞 32 号墳	1B II -1	250	330	0.76	74	0.22					▲									
助王里 68 号墳	1B II 新	324	268	1.21	112	0.42										●				
台城里 5 号墳	1B II 新	379	300	1.26	133	0.44										▲				
石巖里 99 号墳	1B II 新	365	335	1.09	142	0.42										●				
助王里 1 号墳	1B II 新-1	360	340	1.06	90+	不明										▲				
貞栢洞 23 号墳	1B II 新-1	455	470	0.97	120	0.26										▲				
石巖里 255 号墳	1B II 新	331	283	1.17	93	0.33										●				
土城洞 2 号墳	1B II 新	330	330	1	150	0.45										▲				
貞柏里 24 号墳	1B II 新	442	420	1.05	150	0.36										●				
貞栢洞 31 号墳	1B II 新?	不明	不明	不明	不明	不明	不明													
貞柏里 151 号墳	1B II 新	338	278	1.22	100	0.36	不明													
石巖里 253 号墳	1B II 新	326	332	0.98	133	0.4	不明													
石巖里 266 号墳	1B II 新?	440	420	1.05	127	0.3	不明													
助王里 69 号墳	1B II 新	314	257	1.22	96	0.37	不明													
石巖里 292 号墳	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明													
大同江面乙墳	不明	300	240	1.25	不明	不明	不明													
大同江面西墳	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明													
猿岩里古墳	不明	295	253	1.17	不明	不明	不明													
貞栢洞 69 号墳	1B II 新-1	363	363	1	120	0.33	不明													
金灘里古墳	1B III	290	200	1.45	100	0.5	不明													
セナル里古墳	1B III-1	288	198	1.45	90	0.45										●				
楸陵里古墳	1B IV	320	170	1.88	95	0.56	不明													
金鳳里古墳	1B IV	275	164	1.68	120	0.73	不明													
曲里 1 号墳	1B IV?	不明	290	不明	145	0.5	不明													
石材天井單室磚室墓(1C 類)																				
鳳凰里 1 号墳	1C	310	210	1.48	110	0.52	不明													
勝利洞 3 号墳	1C	292	160	1.83	132	0.83										●				
路岩里古墳	1C	292	196	1.49	117	0.6										●				
平壤駅前佟利墓	1C	286	182	1.57	121	0.66										●				
梨川里 1 号墳	1C	280	140	2	100	0.71	不明													
柳巢里 5 号墳	1C	300	206	1.46	120	0.58	不明													
中端里 2 号墳	1C?						不明													



凹凸埴		埴構築形態		平面形		羨道位置					胴張		耳室数			漆喰		参考文献
有	無	壁面	床面	正方形	長方形	両袖			片袖		無	有	0	1	2	無	有	
						中央	左	右	左端	右端								

●		1立3平+平積	c		●	●					●		●			●		有光・藤井 2003
不明		不明	不明	●		●						●	●			不明		関野ほか 1915

●		平積	a	●				●			●	●				不明		谷井 1920
●		1立3平	d	●				●			●	●				●		梅原 1934b
●		1立3平	d	●			●				●	●				不明		梅原 1959
●		1立5平	c	●			●				●	●				●		アンチユンソン 2006
	●	不明	玄室：d, 耳室：不明	●			●				●		●			●		社会科学院考古学研究所田野工作隊 1978
不明		1立3・5平	e	●			●				●	●				不明		榎本 1938
不明		1立3平	c	●			●				●	●				●		科学院考古学および民俗学研究所 1959b
●		1立3平	f	●				●			●	●				●		関野ほか 1925・1927
不明		1立3平	不明	●			●				●		●			不明		考古学雑誌編集部 1935
	●	1立3平	玄室：e, 耳室：c	●			●				●		●			●		社会科学院考古学研究所田野工作隊 1978
	●	1立3・4平	e	●			●				●	●				●		小場 1936
	●	1立3平	d	●			●				●	●				●		1983a 社会科学院考古学研究所
●		1立2平	d変形	●			●				●	●				●		有光・藤井 2003
不明		不明	c?	●			●				不明	●				●		ハンインドク 1990
	●	1立3・4平	e	●			●				●	●				●		関野ほか 1925・1927
	●	1立3平	d	●			●				●	●				●		関野ほか 1925・1927
●		1立3平	f	●			●				●	●				●		
不明		平積	e	●				●			●	●				不明		榎本 1938
不明		1立3平	不明	不明			▲				●	●				不明		
不明		不明	不明	●			▲				不明	●				不明		関野ほか 1915
不明		不明	不明	不明			不明				不明	●				不明		関野ほか 1915
不明		不明	c	●			●				●	●				●		チョンベグン 1958
	●	不明	玄室：d, 耳室：b	●			●				●		●			●		社会科学院考古学研究所田野工作隊 1978
	●	1立3平	c		●		●				●	●				●		キムヨンガン他 1964
	●	1立3平	c		●		●				●		●			●		ユンソンハク 2004
	●	1立2平	c		●				●		●	●				●		アンビョンチャン・ホンウォンビョ 1990
	●	1立3平	c		●				●		●	●				●		チャン Cholman 1994
	●	1立3平	b	不明					●		●	●				●		黑板 1917

不明		不明	不明	●			不明				●	●				●		チョンジュノ 1962
	●	1立3平	c	●					●		●	●				●		キムジェヨン・コヨナム 2002a
	●	1立3平	c	●					●		●	●				●		ハンインドク 2003
	●	1立3平	c	●					●		●	●				●		榎本・野守 1933
	●	1立3平	e	●					●		●	●				●		チャダルマン 2003
不明		1立3平	c	●					●		●	●				不明		パククァンフン 2002, キムジェヨン・コヨナム 2002b
				不明														ハンインドク 1990

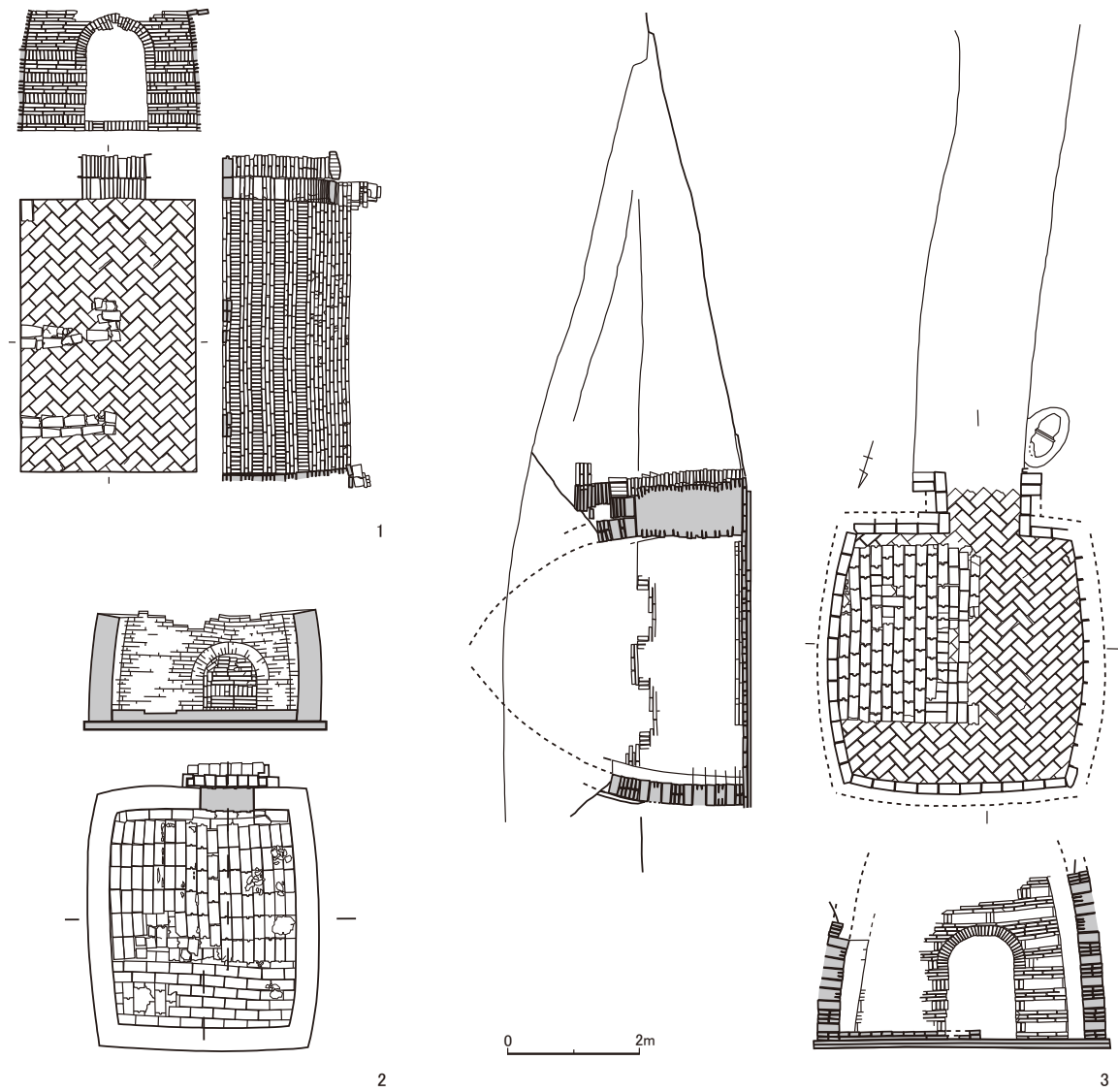


図5 楽浪・帯方郡の単室埴室墓(1)

1. 石巖里218号墳(木材天井単室埴室墓1A類)
2. 松山里1号墳(穹窿式埴天井単室埴室墓1B I 型式)
3. 貞柏里221号墳(穹窿式埴天井単室埴室墓1B II 型式古段階)

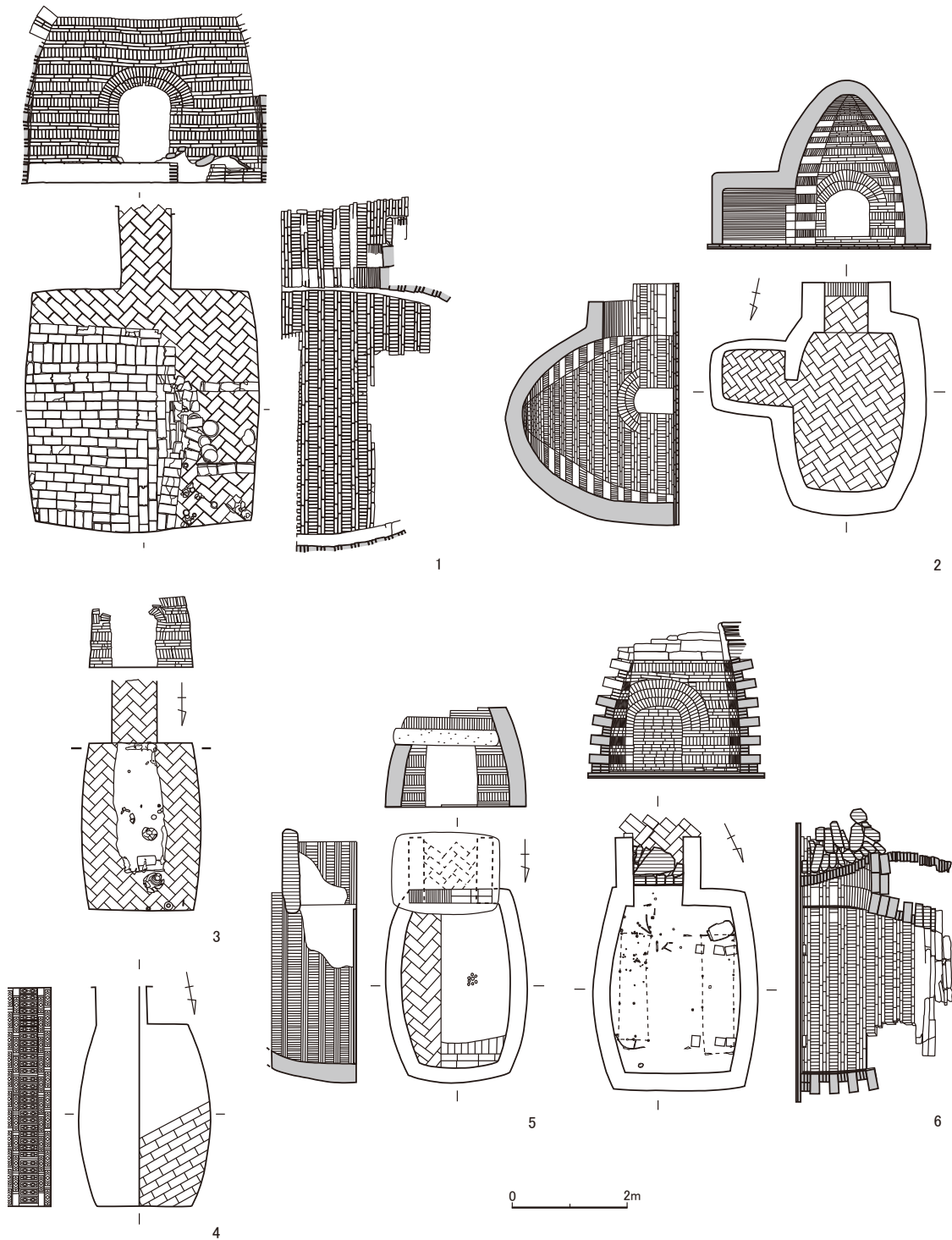


図6 楽浪・帯方郡の単室埴室墓(2)

1. 貞柏里24号墳(穹窿式埴天井単室埴室墓1BⅡ型式新段階)
2. セナル里古墳(穹窿式埴天井単室埴室墓1BⅢ-1型式)
3. 金灘里古墳(穹窿式埴天井単室埴室墓1BⅢ型式)
4. 楸陵里古墳(穹窿式埴天井単室埴室墓1BⅣ型式)
5. 路岩里古墳(石材天井単室埴室墓1C類)
6. 平壤駅前永和九年銘埴出土古墳(修利墓)(石材天井単室埴室墓1C類)

道は玄室短壁の左端に設置するものが主体を占める。壁面は側壁や奥壁が胴張を有し、平積2～3段と立積1段で構築される。床面は網代形に磚を敷くc類である。凹凸磚は使用されていない。耳室をもつものはみられない。墓室の大きさは1BⅢ型式と同様に小型である。また、この時期から壁面に漆喰を塗るものが現れはじめる。

これら1BⅢ型式と1BⅣ型式はこれまで数基しか調査例がなく、不明確な部分が少なくないが、墓室の形態は石材天井単室磚室墓(1C類)と類似する。1C類はこれまで7基が調査され、そのうち5基が報告されている。これら5基の古墳はいずれも墓室平面形が長方形を呈し、羨道形態はc3・c4・a7がみられる。壁面は胴張を有し、平積3段と立積1段で積み上げられ、床面の磚敷はc・e類である。また、壁面に漆喰を塗るものがみられるようになる。これら1BⅢ・1BⅣ型式と1C類は天井形態を除けば、共通する属性が多く、相互に密接な関連性が想定される。

次に計測的属性を用いて検討してみる。使用する属性は墓室長、墓室幅、羨道長であり、墓室長／墓室幅と羨道長／墓室幅の値を散布図に示したのが図4である。これをみると型式ごとに値の分布域が異なっており、計測的属性によっても型式分類が可能であることを示している。また、1BⅠ型式→1BⅡ型式→1BⅢ型式→1BⅣ型式へと値が漸移的に変化していることがわかり、変化の順序がおおむね妥当であることを表している。また、相互に共有する属性が多い1BⅢ・1BⅣ型式と1C類は、計測的属性においても類似することがわかり、両者が同時期の墓制である可能性を示している。

## (2) 編年と検証

最初に前項で型式分類を行った穹窿式磚天井単室磚室墓(1B類)を基準として、諸属性の共有関係から他の磚室墓との併行関係を検討してみる。まず、木材天井単室磚室墓(1A類)については、石巖里218号墳(図5-1)と大同江面甲墳が知られている(表1)。このうち後者については正式な調査報告がなく、果たして木材天井であるのかどうかについても不明確である。一方、前者については近年、報告書が刊行され、詳細を把握できる。石巖里218号墳は胴張のない長方形墓室の天井に木材を掛け渡し、その上を磚で覆っている。羨道形態はa2で、短壁中央に設置された両袖式である。壁面は下半部を平積3段立積1段法で、上部を平積で構築し、床面の磚敷はc類である。羨道形態からみれば、1BⅠ型式と併行するが、壁面と床面の構築法は1BⅡ型式と共通する。したがって、1A類の石巖里218号墳は1BⅠ型式と同時期か、あるいはやや後出するものと推定される。ただし、1A類の類例はいまだ少なく、その存続時期は不明である。

次に木材天井二室磚室墓(2A類)の石巖里120号墳(図7-1)は羨道形態がa1であり、明確な羨道をもたない磚室墓である(表2)。壁面は胴張をもたず、平積1段と立積1段を繰り返して積み上げている。床面の磚敷はa類である。羨道形態からみれば1BⅠ型式よりやや先行し、磚積方法は平積3段立積1段法が使用されていないので、1BⅡ型式より先行するものと推定される。したがって、1BⅠ型式と同時期か、あるいはやや先行する時期に該当するものと考えられる。ただし、この2A類についても詳細を把握できる古墳が1基のみであるので、存続時期はわからない。

穹窿式磚天井二室磚室墓のうちの2Ba類については、3基の古墳のデータを把握することができる。これらの羨道形態はa3またはb1・a4・b2であり、1BⅡ型式と共通する(表2)。このうち羨

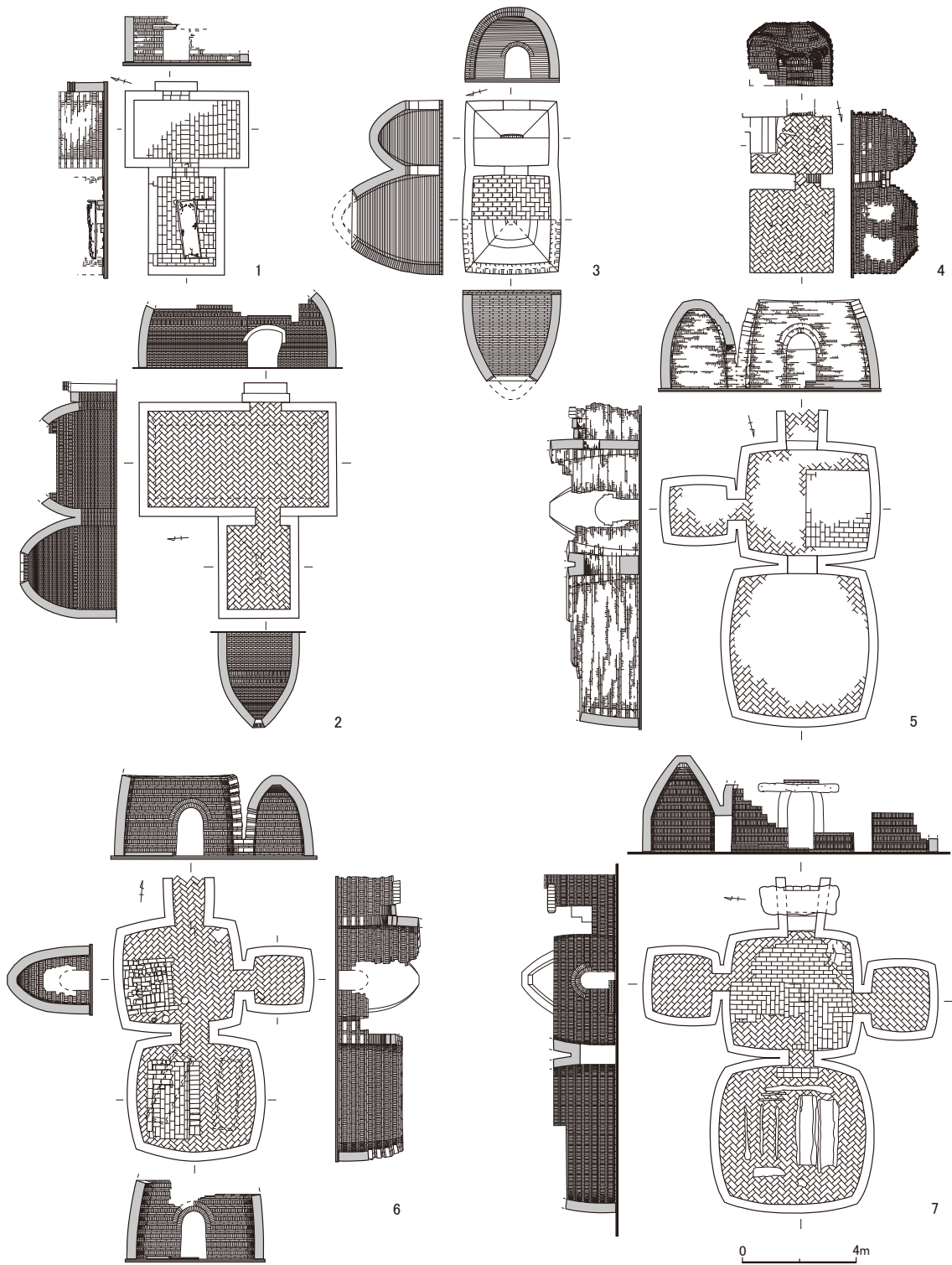


図7 楽浪・帯方郡の二室埴室墓

1. 石巖里120号墳(木材天井二室埴室墓2A類) 2. 土城洞45号墳(穹窿式埴天井二室埴室墓2Ba類) 3. 石巖洞古墳(穹窿式埴天井二室埴室墓2Bb類) 4. 石巖里204号墳(穹窿式埴天井二室埴室墓2Bb類) 5. 貞柏里1号墳(穹窿式埴天井二室埴室墓2Bc-1類) 6. 養洞里3号墳(穹窿式埴天井二室埴室墓2Bc-1類) 7. 南寺里29号墳(穹窿式埴天井二室埴室墓2Bc-2類)



凹凸埴		埴構築形態		平面形				羨道位置			胴張		耳室数			漆喰		参考文献
有	無	壁面	床面	前室		後室		両袖			無	有	0	1	2	無	有	
				正方形	長方形	正方形	長方形	中央	左	右								
●		1立1平	a		●		●			●		●					●	関野ほか 1925・1927
不明		平積 (一部立積み)	c		●		●			●	●		●				●	《朝鮮遺跡遺物図鑑》編集委員会 1989
●		1立3平	前後室：e, 耳室：b		●		●			●		●					●	梅原 1934c
●		1立3平	f		●		●		●			●	●				●	梅原 1934a
	▲	不明	b		●		●					●	●				●	新義州博物館 1961
不明		不明	不明	●			●	●				●	●				不明	関野ほか 1915
	●	1立1・2平	c		●	●				●	●		●				不明	田村 1993
●		平積	不明		●	●				●		●	●				●	関野ほか 1915
	▲	1立3平	不明		●	●				●		●	●				●	社会科学院考古学研究所 1983b
	▲	1立3平	不明		●	●			●			●	●				●	社会科学院考古学研究所 1983b
	●	1立3平	d	●		●			●			●	●				●	梅原 1936a
	●	1立3平	c	●		●			●			●		●			●	関野ほか 1925・1927
	●	1立3平	前後室：d, 耳室：b	●		●			●			●	●				●	小場 1935
	●	1立3平	前後室：d, 耳室：b	●		●		●				●	●				●	梅原 1936b
	●	1立2平	前後室：d変形, 耳室：b	●		●		●				●	●				●	社会科学院考古学研究所 1983a
	●	1立3平	前後室：d, 耳室：b	●		●			●			●	●				●	・榮勳ほか 2001
	●	1立3平	前室・耳室：a, 後室：c	●		●			●			●	●				●	・榮勳ほか 2001
	●	1立3平	前室：d, 後室：c, 耳室：b	●		●			●			●			●		●	《朝鮮遺跡遺物図鑑》編集委員会 1989

段階の値 (0.26 ~ 0.45) とほぼ重なる。したがって、2Bc 類の大部分が 1B II 型式新段階と併行し、埴室墓の最盛期に造営されたものと考えられる。2Bc 類には耳室をもつものが多いのも特徴である。耳室を 1 個もつもの (2Bc-1 類) には将進里 45 号墳、貞柏里 1 号墳 (図 7-5)、南寺里 2 号墳、養洞里 3・5 号墳 (図 7-6) などがあり、2 個もつもの (2Bc-2 類) には南寺里 29 号墳 (図 7-7) がある。また、南井里 53 号墳、養洞里 3・5 号墳などでは漆喰の使用が認められるが、これらは壁面に塗布したものではなく、埴と埴の隙間の補強に使用したものである。

次にこれらの編年を検証してみる。検証に用いる資料は埴の文様と厚さ、出土銅鏡であり、埴に記された紀年銘をもとに実年代を推定する。まず、埴文様には菱形文などの幾何学文様と、動物文などの形象文様があるが、検証に用いるのは主に前者である。幾何学文様は直線文系と曲線文系に大別される (図 8)。直線文系の主なものには菱形文、X 字文、格子文、平行線文、綾杉文などがあり、曲線文系には曲線文、円文、弧文、S 字文などがある。これら幾何学文の中で変化の方向を推定できるものは菱形文と曲線文である。菱形文は埴文様の主体を占めており、最も多く使用された文様である。菱形文は以下のように 12 種に分類できる (図 9)。<sup>(7)</sup>

菱形文 I : 四重以上の精文菱形の中に珠文を入れたもの。

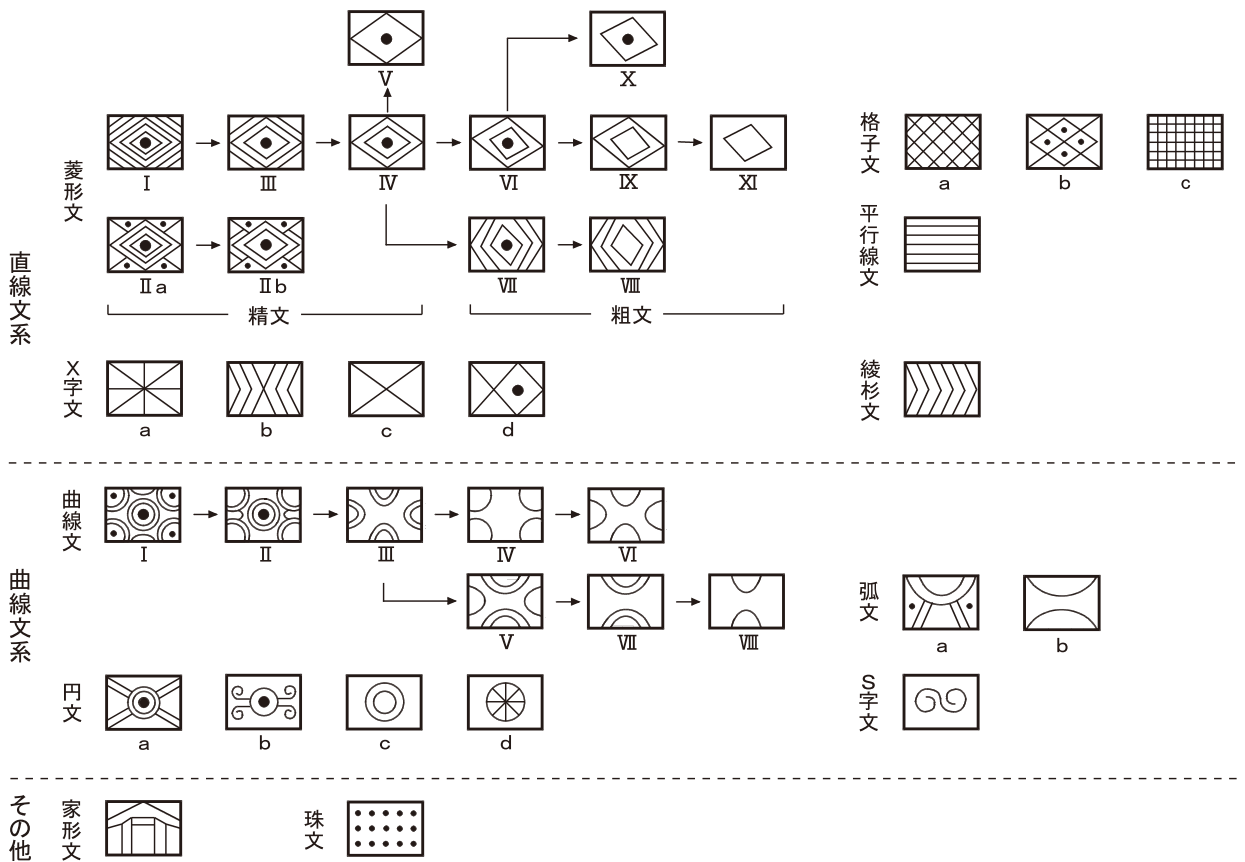


図8 博文様の分類

菱形文Ⅱ：三～二重の精文菱形の中に珠文をいれ、その周囲に斜線文と珠文を加えたもの。

このうち三重菱形ものをⅡa、二重菱形のものをⅡbとする。

菱形文Ⅲ：三重の精文菱形の中に珠文を入れたもの。

菱形文Ⅳ：二重の精文菱形の中に珠文を入れたもの。

菱形文Ⅴ：一重の精文菱形の中に珠文を入れたもの。

菱形文Ⅵ：二重の粗文菱形の中に珠文を入れたもの。

菱形文Ⅶ：珠文を入れた一重の粗文菱形の外側にいくつかの綾杉文を加えたもの。

菱形文Ⅷ：珠文をもたない一重の粗文菱形の外側にいくつかの綾杉文を加えたもの。

菱形文Ⅸ：二重の粗文菱形で、中に珠文を入れないもの。

菱形文Ⅹ：一重の粗文菱形の中に珠文を入れたもの。

菱形文Ⅺ：一重の粗文菱形で、中に珠文を入れないもの。

これらの菱形文のうちⅠ～Ⅴが精文であり、Ⅵ～Ⅺが粗文である。<sup>(8)</sup> 変化の方向としては、図8に示したように、基本的には精文から粗文へと変化し、文様が退化していくものと想定されるが、Ⅳ→Ⅶのように粗文菱形と区画の隙間を単に綾杉文で充填するようになる変化もみられる。

曲線文は、数量的にそれほど多い文様とはいえないが、以下の8種に分けられ、変化の方向をある程度想定できる。



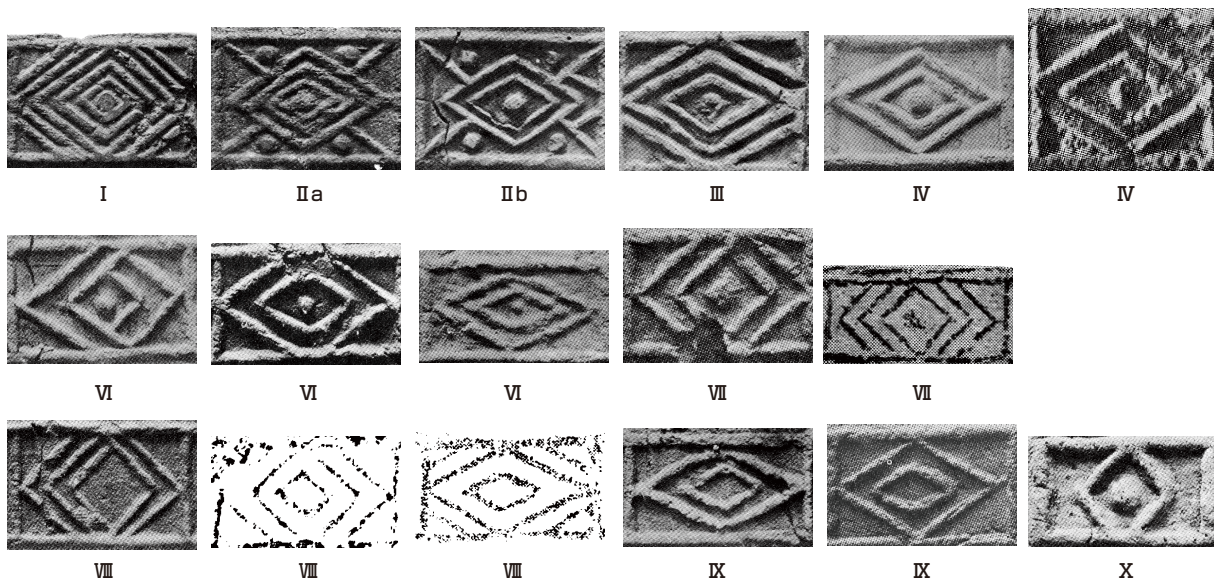


図9 埴文様(菱形文)のバリエーション

I・IIa: 貞柏里2号墳 III・IIb: 石巖里6号墳 IV: 石巖里120号墳・石巖洞古墳 VI: 石巖里99号墳・貞柏里151号墳・貞柏里1号墳  
VII: 貞柏里1号墳 VIII: 貞柏里151号墳・養洞里5号墳 IX: 貞柏里151号墳・石巖里253号墳 X: 貞柏里151号墳

曲線文Ⅰ：四隅に二重の曲線文，中央に二重の同心円文を配置し，それぞれの中に珠文を入れるもの。

曲線文Ⅱ：四隅に二重の曲線文，中央に珠文を入れた二重の同心円文を配置するもの。

曲線文Ⅲ：二重の曲線文を向かい合うように各辺に配置するもの。

曲線文Ⅳ：一重の曲線文を四隅に配置するもの。

曲線文Ⅴ：Ⅲの曲線文のいずれかが一重になったもの。

曲線文Ⅵ：Ⅲの曲線文がすべて一重になったもの。

曲線文Ⅶ：二重の曲線文を向かい合うように上下の辺に配置するもの。他の文様と組み合わせられて部分的に用いられる場合もある。

曲線文Ⅷ：Ⅶの曲線文が一重になったもの。他の文様と組み合わせられて部分的に用いられる場合もある。

これら曲線文も図8に示したように，文様が退化していく方向に変化するものと予想される。

これらの文様のほかにも，変化の方向は想定できないが，直線文系として十字文a～d，格子文a～c，平行線文，綾杉文，曲線文系として円文a～d，弧文a・b，S字文，その他の文様として家形文や珠文などがある。

文様埴の厚さについては，時期が下るにつれ薄くなるという変化を指摘したことがある〔高久<sup>(9)</sup>1993〕。埴の厚さが薄くなれば，複雑な文様を入れることは困難となる。つまり，埴の厚さの変化と先に述べた文様の退化とは密接な関係があるといえる。埴の厚さは厚さ／長さの値で表すこととする。

まず，編年の主軸となる穹窿式埴天井単室埴室墓（1B類）からみてみる。表3に示したように，1BⅠ型式は埴文様が不明であるが，1BⅡ型式古段階の貞柏里221号墳では菱形文Ⅲ・Ⅳ・Ⅴなど

表3 楽浪・帯方郡単室埴室墓の文様埴と銅鏡(●:有)

古墳名	型式・類型	文様埴																紀年銘	厚/長 (平均)	出土銅鏡				
		菱形文	X字文				格子文			平行線文	綾杉文	曲線文	円文				弧文				S字文	家形文	珠文	其他
			a	b	c	d	a	b	c				a	b	c	d								
木材天井単室埴室墓(1A類)																								
石蔵里218号墳	1A	IV・V	●																		0.18	盤龍鏡(ⅡB)1		
大同江面甲墳	1A	不明																	不明	鉄鏡1				
穹窿式埴天井単室埴室墓(1B類)																								
松山里1号墳	1B I	不明																	不明	上方作系浮彫式 獸帯鏡(六像A式)1				
貞柏里221号墳	1B II古	Ⅲ・Ⅳ・V	●															●		0.18	内行花文鏡(四 葉座Ⅳ)1、上方 作系浮彫式獸帯 鏡(六像A)1			
南井里120号墳	1B II古	Ⅶ・Ⅷ								●								●		0.13				
勝利洞86号墳	1B II古?	●								●										0.17	内行花文鏡(四 葉座ⅤB)1			
貞栢洞32号墳	1B II-1	無文																	0.14					
台城里5号墳	1B II新	Ⅲ																		0.16	内行花文鏡(四 葉座)1			
石蔵里99号墳	1B II新	Ⅵ・Ⅶ			●													●		0.14				
助王里1号墳	1B II新-1	Ⅵ・Ⅷ・Ⅹ								●								Ⅷ		不明				
貞栢洞23号墳	1B II新-1									●										0.18				
石蔵里255号墳	1B II新	Ⅵ?																		不明	内行花文鏡(編 蝠座Ⅰ)1			
土城洞2号墳	1B II新	Ⅵ?・Ⅷ・Ⅸ?			●		●		●									●		0.17				
貞柏里24号墳	1B II新	Ⅵ																●		不明	内行花文鏡(四 葉座Ⅳ)1、夔 鳳鏡(單夔鏡)1			
貞栢洞31号墳	1B II新?	Ⅷ・Ⅸ・Ⅺ	●	●	●	●	●	●	●								●	●	興平二年 (A.D.195)	不明	鉄鏡			
貞柏里151号墳	1B II新	Ⅵ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ	●			●		●	●	●	Ⅵ	●	●	●						0.15				
石蔵里253号墳	1B II新	Ⅶ・Ⅸ	●							●								●		0.14				
石蔵里266号墳	1B II新?	Ⅵ?																●	●	不明				
石蔵里292号墳	不明	文様 有																	不明					
大同江面乙墳	不明	文様 有																	不明	内行花文鏡(四 葉座Ⅳ)1				
貞栢洞69号墳	1B II新-1	●																		0.16	鏡2			
金灘里古墳	1B III	無文																	不明					
セナル里古墳	1B III-1	●																	●	嘉平四年 (A.D.252)	0.16			
楸陵里古墳	1B IV	文様 有																	0.14	太康四年 (A.D.283)				
金鳳里古墳	1B IV	Ⅶ・Ⅹ																●		0.16				
曲里1号墳	1B IV?	文様 有																	不明					
石材天井単室埴室墓(1C類)																								
鳳凰里1号墳	1C	不明																正始九年 (A.D.248)	不明	双頭龍文鏡1				
勝利洞3号墳	1C	無文																	不明					
路岩里古墳	1C	不明																建武八年 (A.D.342)	0.18					
平壤駅前修利墓	1C	Ⅵ(三区画)																		永和九年 (A.D.353)	0.16			
梨川里1号墳	1C	●																		不明				
柳栗里5号墳	1C	●																		不明				

















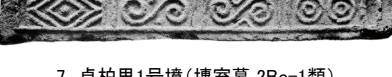



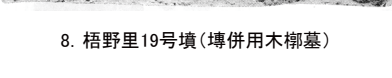
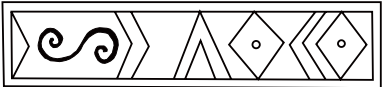
A.D. 100	1B I 型式 以前	 <p>1. 貞柏里2号墳(埴併用木槨墓)</p>  <p>2. 石巖里6号墳(埴併用木槨墓)</p>
150	1B I 併行 期	 <p>3. 石巖里120号墳(埴室墓 2A類)</p> 
	1B II 併行 期	 <p>4. 石巖洞古墳(埴室墓 2Bb類)</p>
200	1B II 併行 期	  <p>5. 石巖里99号墳(埴室墓 1B II 型式新段階)</p>         <p>7. 貞柏里1号墳(埴室墓 2Bc-1類)</p>   <p>8. 梧野里19号墳(埴併用木槨墓)</p>   <p>9. 南井里116号墳(埴併用木室墓)</p>
300	1B IV 併行 期	 <p>10. 金鳳里古墳(埴室墓 1B IV 型式)</p>

図10 楽浪郡の埴文様の变化

のと推定される<sup>(10)</sup>。

次に他の単室墓について検証してみる。まず、木材天井単室埴室墓（1A類）の石巖里218号墳については、1BⅠ型式～1BⅡ型式古段階と併行すると考えたが、埴の文様や厚さ／長さの値においても、1BⅡ型式古段階の貞柏里221号墳と類似している。したがって、石巖里218号墳の年代も2世紀後半代と推定される。これは盤龍鏡ⅡB式が出土していることとも矛盾しない<sup>(11)</sup>。

石材天井単室埴室墓（1C類）は1BⅢ・1BⅣ型式と共通する属性が多いが、埴文様においても退化した菱形文が伴い、無文のものが現れている。紀年銘埴は正始九年（248年）、建武八年（342年）、永和九年（353年）が出土していることから、3世紀中葉～4世紀中葉の年代が与えられ、3世紀中葉以降という1BⅢ・1BⅣ型式の実年代とほぼ一致する。

二室埴室墓のうち、木材天井二室埴室墓（2A類）の石巖里120号墳は1BⅠ型式と同時期かそれ以前と推定されるが、埴文様は精文の菱形文Ⅳと曲線文Ⅱ・Ⅲで、その他の文様は伴わない（図10-3、表4）。埴の厚さ／長さの値は0.19であるので、1BⅡ型式古段階より先行することがわかる。したがって、石巖里120号墳は1BⅠ型式とほぼ同時期と考えられ、2世紀中葉ごろの年代が与えられる。

穹窿式埴天井二室埴室墓2Ba類は土城洞45号墳が1BⅡ型式古段階と、貞柏里227号墳と貞柏里219号墳が1BⅡ型式新段階と併行する。埴文様をみると、やはり土城洞45号墳では精文の菱形文Ⅳが伴い、1BⅡ型式古段階の貞柏里221号墳などと共通するのに対し、貞柏里227号墳と貞柏里219号墳では粗文の菱形文Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅹが主体を占めており、1BⅡ型式新段階の貞柏里151号墳と類似する。徳星里1号墳は羨道形態が不明であるが、埴の文様と厚さ／長さの値からみれば、1BⅡ型式新段階と同時期と推定される。

穹窿式埴天井二室埴室墓2Bb類のうち石巖里204号墳と石巖洞古墳は不確定ながら1BⅠ型式～1BⅡ型式古段階の時期と推定したが、後者では精文の菱形文Ⅳが伴い（図10-4）、埴の厚さ／長さの値が2.0であるので、1BⅠ型式～1BⅡ型式古段階の埴と類似する。ただし、曲線文Ⅳが伴うことから、曲線文Ⅱ・Ⅲが出土した1BⅠ型式併行期の石巖里120号墳より若干後出するものと考えられる。出土した鏡は内行花文鏡四葉座Ⅲ式と盤龍鏡ⅠA式であり、1BⅡ型式新段階より確実に先行する。2世紀後半の築造年代が与えられるであろう。

穹窿式埴天井二室墓の主流をなす2Bc類は1BⅡ型式新段階と共通する要素が多いが、埴文様においても粗文の菱形文Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸと格子文や円文などの多くの文様が共伴しており（図10-7）、1BⅡ型式新段階の文様構成と類似する。埴の厚さ／長さの値も0.14～0.17であり、1BⅡ型式新段階の0.14～0.18とほぼ同一である。鏡についても養洞里5号墳で夔鳳鏡が出土しており、1BⅡ型式新段階と共通する。

以上、埴室墓の編年と検証を行った。資料不足から必ずしも十分でない部分もあるが、型式分類と併行関係の検討による編年をほぼ検証することができた。その結果、穹窿式埴天井単室埴室墓（1B類）については、1BⅠ型式・1BⅡ型式（古段階・新段階）・1BⅢ型式・1BⅣ型式に分類でき、正方形墓室に短い両袖羨道をもつものから、しだいに羨道が長くなり、長方形墓室に両袖羨道をもつものを経て、長方形墓室に片袖羨道をもつものへと変化することがわかった。実年代については紀年銘埴などから、1BⅠ型式が2世紀中葉、1BⅡ型式古段階が2世紀後葉前半、1BⅡ型

式新段階が2世紀後葉後半～3世紀前葉、1BⅢ型式が3世紀中葉、1BⅣ型式が3世紀後葉～4世紀中葉と推定される。このうち1BⅡ型式がいわゆる典型的な楽浪埴室墓であり、この時期から古墳数が増加し、最盛期をむかえる。1BⅢ型式や1BⅣ型式の時期になると、楽浪郡の中心である平壤地域では埴室墓の数が減少し、主体は帯方郡の黄海道地域へ移っていくようである。また、1BⅠ型式の時期には、木材天井単室埴室墓(1A類)の石巖里218号墳や木材天井二室埴室墓(2A類)の石巖里120号墳が造営されており、次の1BⅡ型式古段階の時期には穹窿式埴天井二室埴室墓2Ba類の土城洞45号墳や2Bb類の石巖洞古墳が出現している。最も古墳数の多い1BⅡ型式新段階の時期には穹窿式埴天井二室埴室墓2Ba類の貞柏里227号墳や貞柏里219号墳、2Bc類の南井里53号墳などが造営されている。この時期の2Bc類には耳室をもつものが多くみられ、2Bc-1類の貞柏里1号墳、将進里45号墳、南寺里2号墳、養洞里3・5号墳や2Bc-2類の南寺里29号墳など大型の埴室墓が多数造営されている。最後の1BⅢ・1BⅣ型式の時期には、穹窿式埴天井単室埴室墓とともに石材天井単室埴室墓(1C類)が併存していたことが明らかとなった。

## ②……………埴併用木槨墓と埴室墓との関係について

埴室墓と同様に埴を用いた墓制として埴併用木槨墓がある。朝鮮の研究者は木槨墓→埴併用木槨墓→埴室墓という変遷過程を主張しており、埴併用木槨墓を木槨墓から埴室墓へと変化する過渡的な墓制として位置付けている[リスンジン1997]。つまり、埴併用木槨墓のように木槨墓の一部に埴を用いた墓制を経て、完全な埴室墓へと変化したとみるのである。そして、埴併用木槨墓の年代を1世紀末～2世紀初頭に比定し、これに後続する典型的な埴天井埴室墓の成立を2世紀中葉とする。しかし、埴併用木槨墓の梧野里19号墳では画文帯求心式神獸鏡が出土しており、はたして埴併用木槨墓のすべてを1世紀末～2世紀初頭に位置づけられるか疑問が残る。ここでは、埴併用木槨墓における埴の使用法、埴文様・形態、出土銅鏡等から、その所属時期を明らかにし、埴室墓との関係を検討したい。また、埴併用木槨墓・埴室墓と木槨墓との併行関係についても整理してみる。

これまで調査された埴併用木槨墓は約13基あるが、そのうち内容を検討できるのは表5に示した9基のみである。<sup>(12)</sup>まず、貞柏里127号墳(王光墓)(図11-1)は平面正方形の同穴合葬木槨墓であり、木槨BⅡ型式に該当する[小場・榎本<sup>(13)</sup>1935]。埴は天井上部に二重に敷かれており、上・下層ともに埴を平行に並べている。凹凸埴は使用されておらず、長側面に文様もない。埴の厚さ/長さの値は0.19～0.15であり、比較的厚めの埴が用いられている。出土した鏡は異体字銘帯鏡(V式)と方格規矩四神鏡(VA式)であり、前者の出現時期は紀元前後までさかのぼるが、後者は紀元後1世紀中葉である。したがって、この墳墓の築造年代はおおむね1世紀代と推定される。西棺内からは「楽浪太守掾王光之印」「臣光」銘両面木印が出土しており、楽浪郡の最盛期における上位階層の墳墓と推定される。

貞柏里2号墳(図11-2)は平面形が正方形を呈する木槨BⅡ型式の同穴合葬木槨墓である[関野ほか1925・1927]。木槨下の墓壇底に埴敷があり、四壁の外側にも埴積壁が構築されている。木槨天井上部にも埴が敷かれていた可能性がある。埴は凹凸埴で、長側面には幾何学文が付けられている。文様は精文の菱形文I・IIaと曲線文Iであり(図10-1)、埴の厚さ/長さの値が0.18と

表5 楽浪郡における埴併用木槨墓属性表(●:有)

古墳名	埋葬主体部型式 (高久1994による)	埴使用形態			凹凸埴		文様埴			厚/長 (平均)	銅鏡	参考文献
		床面	天井	壁面	有	無	直線文系		曲線文系			
							菱形文	綾杉文	曲線文			
貞柏里127号墳 (王光墓)	木槨BⅡ(埴天井)	無	平行敷	無	●		無文			0.19~0.15	方格規矩四神鏡Ⅰ(VA) 異体字銘帯鏡Ⅰ(V)	小場・榎本 1935
貞柏里2号墳	木槨BⅡ(埴槨)	a?	有?	立積	●		I・Ⅱa		I	0.18	細線式獸帯鏡Ⅰ(ⅣA) 内行花文鏡Ⅰ(四葉座Ⅲ)	関野ほか 1925・1927
石巖里6号墳	木槨BⅣ(埴槨)	a	平行敷	立積	●		Ⅱb・Ⅲ			0.2	内行花文鏡Ⅰ(四葉座Ⅱ) 方格規矩四神鏡Ⅰ(VB)	関野ほか 1925・1927
貞栢洞7号墳	木槨BⅢ(埴敷)	a	無	無	●		Ⅲ or Ⅶ			0.16		社会科学院考古学研究所 1983a
貞栢洞2号墳	木槨BⅢ(埴敷)	c	無	無	●		幾何学文様あり			0.17	内行花文鏡Ⅰ(四葉座Ⅳ)	社会科学院考古学研究所 1983a
貞栢洞46号墳	木槨?(埴敷)	c	無	無	●	●				0.16		社会科学院考古学研究所 田野工作隊 1978
栢野里19号墳	木槨BⅣ改造a (埴槨)	無	無	平積		不明	Ⅷ	●		0.16	画文帯求心式神獸鏡Ⅰ	野守ほか 1935
石巖里293号墳	木槨BⅡ改造a (埴敷)	c?	無	無	●		埴室墓の石巖里292号墳と同じ埴文様			不明	内行花文鏡(長宜子孫)Ⅰ 画文帯環状乳神獸鏡Ⅰ	中村 1968
南井里116号墳 (彩篋塚)	木室墓	無	平積 (玄門上部)	無	●			●		0.12	上方作系浮彫式獸帯鏡Ⅰ (六像B)	小泉・澤 1934

いう厚めの埴を使用している。文様からみて、穹窿式埴天井単室埴室墓ⅠBⅠ型式段階よりも確実にさかのぼる。鏡は細線式獸帯鏡(ⅣA式)と内行花文鏡(四葉座Ⅲ式)であり、両者とも1世紀中葉~後葉に比定される。楽浪古墳でこれと類似した鏡群を副葬したものとして、石巖里205号墳(王肝墓)があげられる[原田・田澤 1930]。石巖里205号墳では内行花文鏡(四葉座Ⅱ式:径23cm, ②四葉座Ⅱ式・円座Ⅰ式)と細線式獸帯鏡(ⅣA式)が出土しており、建武廿一年(45年)、建武廿八年(52年)、永平十二年(69年)の紀年銘漆器が共伴している。したがって、石巖里205号墳は1世紀後葉が上限年代と推定され、貞柏里2号墳もこれに近い年代が与えられるであろう。

石巖里6号墳(図11-3)は平面正方形の木槨の周囲に一重の埴槨を有するもので、前述した貞柏里2号墳に類似する[関野ほか 1925・1927]。石巖里6号墳では木槨天井上部に敷かれた埴も良好に残存していた。墓壇底には平行に埴を敷き、壁面は埴を横向きに立てた状態で積み上げている。天井部は床面と同様に埴を平行に敷き並べている。木槨はBⅣ型式であり、貞柏里2号墳のようなBⅡ型式よりも新しい。埴槨の構築には有文の凹凸埴が多く用いられている。埴文様は菱形文Ⅱb・Ⅲで(図10-2)、埴の厚さ/長さの値は0.2であり、かなり厚い埴を用いている。埴の文様からみて、貞柏里2号墳より時期的にやや下るものと考えられる。鏡は内行花文鏡(四葉座Ⅱ式)と方格規矩四神鏡(VB式)であり、前者は1世紀前半、後者は1世紀後半に比定される。鏡は

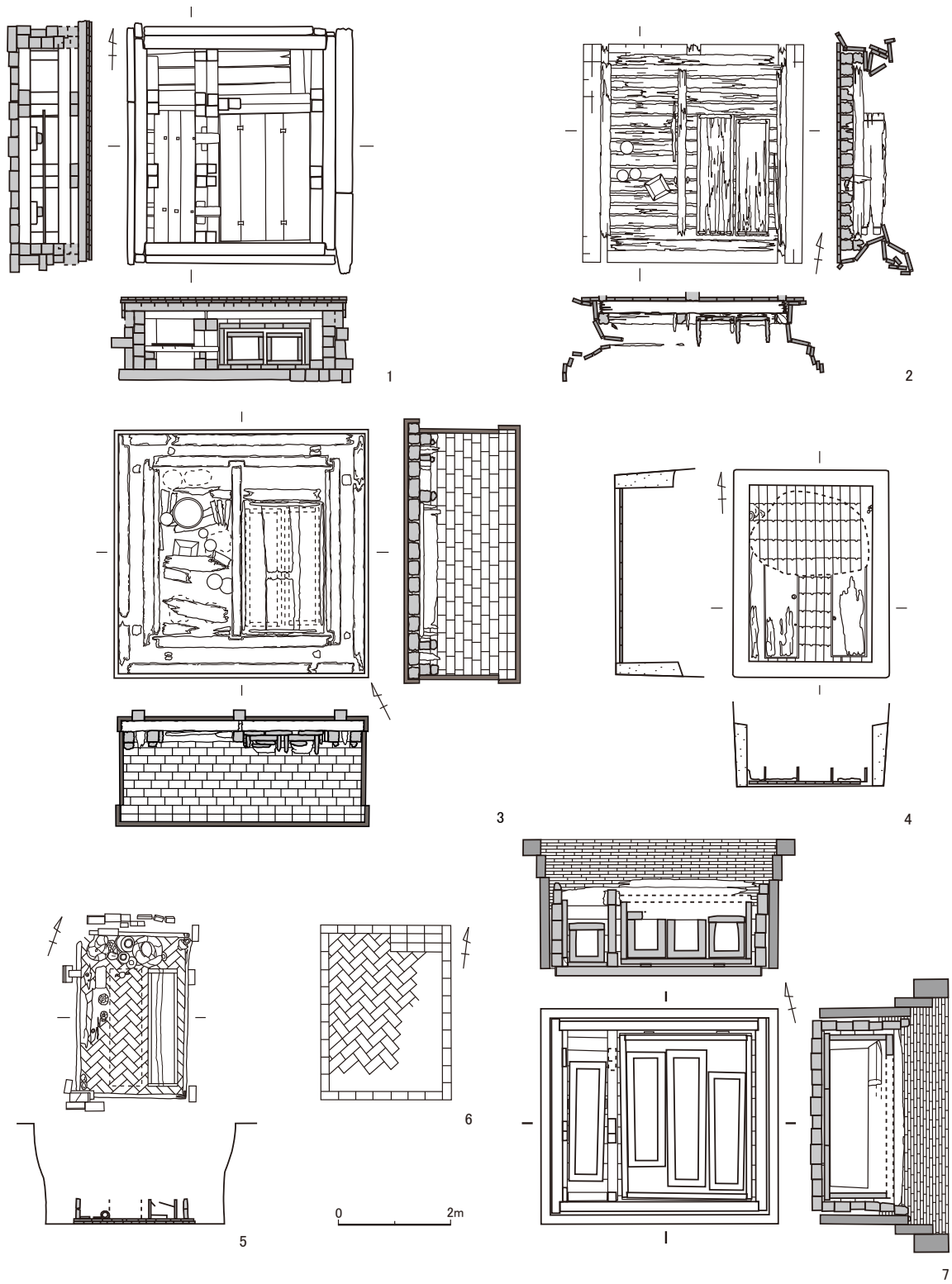


図11 楽浪郡の埴井用木槨墓

1. 貞柏里127号墳 2. 貞柏里2号墳 3. 石巖里6号墳 4. 貞梧洞7号墳 5. 貞梧洞2号墳 6. 貞栢洞46号墳  
7. 梧野里19号墳



やや古い要素をもっているが、貞柏里2号墳に後続することを考慮すれば、石巖里6号墳の年代は2世紀前葉と推定される。

貞栢洞7号墳(図11-4)は長方形の同穴合葬木槨墓(木槨BⅢ型式)の床面に埴を敷いたもので、すべてが凹凸埴である[社会科学院考古学研究所1983]。埴の長側面には三重の菱形文が付けられていたとされるが、具体的な形状は不明である。埴の厚さ/長さの値は0.16であり、穹窿式埴天井単室埴室墓1BⅡ型式新段階の埴と類似する。床面の埴敷はa類であり、やや古い要素がみられる。具体的な時期を推定することは困難であるが、1BⅠ型式～1BⅡ型式と併行する時期に比定しておきたい。

貞栢洞2号墳(図11-5)は長方形同穴合葬木槨墓(木槨BⅢ型式)であり、木槨床面の下に埴を敷いている[社会科学院考古学研究所1983]。埴は二層になっており、下層は凹凸埴を平行に並べ、上層は柄のない埴を網代形に敷いている(c類)。いずれの埴にも長側面に幾何学文が付けられている。埴の厚さ/長さの値は0.17であり、1BⅡ型式新段階の埴と共通する。鏡は内行花文鏡(四葉座Ⅳ式)が出土しており、1BⅡ型式の埴室墓から出土する鏡と同一である。したがって、貞栢洞2号墳は1BⅡ型式と同時期に該当すると考えられる。

貞栢洞46号墳(図11-6)は長方形木槨の床面下に埴を敷いたものであるが、木槨はすでに失われており、具体的な形態は不明である[社会科学院考古学研究所田野工作隊1978]。埴敷はc類であり、凹凸埴は使用されていない。埴の長側面には菱形文がみられ、埴の厚さ/長さの値は0.16である。貞栢洞2号墳と同様に1BⅡ型式と併行する時期と推定される。

栢野里19号墳(図11-7)は平面正方形の同穴合葬木槨墓(木槨BⅣ改造a)で、木槨四壁の外側に埴を平積みして埴壁を構築している[野守ほか1935]。報告されている埴は長側面を三分割して文様を入れたものであるが、粗文の菱形文Ⅷと綾杉文が入れられている(図10-8)。埴の厚さ/長さの値は0.16である。これらの特徴は1BⅡ型式新段階と共通する。鏡は画文帯求心式神獸鏡が出土している。楽浪古墳ではこれまで10基の古墳から画文帯神獸鏡が出土しているが、このうち7基が単室埴室墓であり、埴室墓の最盛期における鏡式であることがわかる。<sup>(14)</sup>したがって、栢野里19号墳の築造時期は2世紀末～3世紀前葉と推定される。

南井里116号墳(彩篋塚)は前室と後室からなる横口式の木室墓であるが、玄門上部に文様埴を平積みしていた。埴槨や埴敷はもたないので、他の埴併用木槨墓とは性格が異なるが、埴を用いた木室墓として、この類に含めておく。文様埴は四分割した区画に綾杉文を入れたもので(図10-9)、厚さ/長さの値は0.12である。鏡は上方作系浮彫式獸帯鏡六像B式であり、同様の鏡は穹窿式埴天井単室埴室墓1BⅠ型式の松山里1号墳や1BⅡ型式古段階の貞柏里221号墳で古式の六像A式が出土している。これら文様埴と銅鏡からみて、南井里116号墳は栢野里19号墳と同じく1BⅡ型式新段階と併行する時期と推定される。

石巖里293号墳は1942年に朝鮮総督府博物館と平壤府博物館によって調査された古墳であるが、詳細は未報告である[中村1968]。ただし、梅原考古資料に調査者である中村春寿と樋口隆康が梅原末治宛てに送った図面・写真・書簡が残っている[梅原考古資料4344～4361・9768]。それによれば、木槨(木槨BⅡ改造a)は平面正方形を呈し、墓壙底に文様埴が敷かれている。埴敷は二層になっており、前述した貞栢洞2号墳と同様に下層が平行に、上層が網代形になっている。鏡は内行花文

鏡とともに画文帯環状乳神獸鏡が出土していることから、前述した梧野里19号墳とほぼ同時期と考えられる。また石巖里293号墳と同時併行で石巖里292号墳が調査されていた。石巖里292号墳は天井部分が落下していたが、壁面が胴張をもち、平積3段立積1段を繰り返して構築された典型的な埴室墓である。この石巖里292号墳と石巖里293号墳に使用された埴の文様が全く同じであることを、調査中、中村が梅原に宛てた手紙で記している〔梅原考古資料9768〕。したがって、埴文様からも石巖里293号墳が埴室墓の最盛期に造営された埴併用木槨墓であることがわかる。

以上、埴併用木槨墓の造営時期について検討した結果、最も時期的にさかのぼるものは貞柏里127号墳で、1世紀代である。また、貞柏里2号墳と石巖里6号墳も1世紀後葉～2世紀前葉に造営されたものであり、穹窿式埴天井単室埴室墓1BⅠ型式よりも先行する。しかし、貞栢洞2号墳、梧野里19号墳、石巖里293号墳などは穹窿式埴天井単室埴室墓の最盛期に築造された埴併用木槨墓であることが明らかである。したがって、朝鮮の研究者が主張するように、埴併用木槨墓が典型的な埴室墓に先行する墓制であるとは、必ずしもいえないことがわかる。さらに、貞栢洞2号墳、貞栢洞46号墳、石巖里293号墳の床面に見られるような網代形の埴敷は、木槨墓の要素ではなく、典型的な埴室墓の要素といえる。つまり、文様埴が使用された埴併用木槨墓は木槨墓から埴室墓への過渡的な墓制ではなく、むしろ、埴室墓が成立した後に、埴室墓の要素を木槨墓に導入して造られた埋葬施設である可能性が高くなる。この仮説が正しければ、貞柏里2号墳と石巖里6号墳が造営された1世紀後葉～2世紀前葉に、すでに埴室墓が出現していた可能性も出てくる。貞柏里2号墳や石巖里6号墳では文様埴が使用されていた。墓壙底や木槨の四壁外を覆うのであれば、文様埴は必ずしも必要ない。事実、貞栢洞2号墳では埴を縦向きに立てた状態で、石巖里2号墳では埴を横向きに立てた状態で積み上げられており、埴と埴に挟まれて、文様面がみえないようになっていた。にもかかわらず、文様埴が使われていた<sup>(15)</sup>ということは、このような文様埴を必要とする墓制が別に存在したことを示しているのではないだろうか。現段階で埴室墓の上限年代は穹窿式埴天井単室埴室墓1BⅠ型式や木材天井二室埴室墓(2A類)の石巖里120号墳など、2世紀中葉であるが、今後、1世紀後葉～2世紀前葉までさかのぼる埴室墓が発見される可能性は十分残されているといえる。

最後にこれら埴併用木槨墓・埴室墓と木槨墓の併行関係についてまとめておきたい。楽浪郡の木槨墓については、すでにⅠ期～Ⅴ期に編年する案を提示している<sup>(16)</sup>。まず、埴併用木槨墓の貞柏里127号墳については、鏡などからⅢ期に編年することができる。貞柏里2号墳では、前述したようにⅣ期の木槨墓である石巖里205号墳と同一の鏡式が出土しており、同時期と考えられる。穹窿式埴天井単室埴室墓1BⅡ型式古段階併行の石巖洞古墳では内行花文鏡四葉座Ⅲ式と盤龍鏡ⅠA式が出土している。このうち后者の鏡式はⅣ期の将進里30号墳でも出土しており、1BⅡ型式古段階はⅣ期と併行する可能性がある。1BⅡ型式新段階と併行する梧野里19号墳は画文帯神獸鏡が出土しており、Ⅴ期に該当する木槨墓である。また、同じくⅤ期の横口式木室墓である南井里116号墳(彩篋塚)では、玄門上部に文様埴が平積みされていた〔小泉・澤1934〕。その文様は綾杉文で、埴の厚さ／長さの値は0.12である。これは1BⅡ型式新段階の文様埴と類似する。南井里116号墳では上方作系浮彫式獸帯鏡六像B式が出土しているが、これは1BⅡ型式古段階の貞柏里221号墳で出土している六像A式に後続する型式である。したがって、1BⅡ型式新段階はⅤ期と併

行するものと考えられる。以上の点からみて、埴併用木槨墓はⅢ期に現れ、Ⅴ期まで造営されたことがわかる。また、穹窿式埴天井単室埴室墓 1BⅠ型式と 1BⅡ型式古段階がおおむねⅣ期、1BⅡ型式新段階がⅤ期と併行すると考えられる。また、1BⅡ型式新段階より後出する 1BⅢ型式・1BⅣ型式・石材天井単室埴室墓（1C類）はⅤ期以降に該当すると推定される。

### ③……………埴室墓・石材天井埴室墓・横穴式石室墓の関係について

石材天井埴室墓が楽浪・帯方郡末期に造営された墓制であることを述べたが、朝鮮の研究者は埴天井埴室墓から横穴式石室へと変化する過渡的な墓制であると主張する。つまり、埴天井埴室墓→石材天井埴室墓→横穴式石室墓という変遷過程を強調し、楽浪の墓制である埴室墓から高句麗の墓制である横穴式石室へのスムーズな移行を証明しようとするのである〔リスンジン 1997〕。また、石材天井埴室墓の出現は埴天井埴室墓の終焉を示すとした上で、石材天井埴室墓のうち最も古い紀年銘埴をもつ鳳凰里 1 号墳（248 年）から、埴天井埴室墓の下限年代を 3 世紀中葉としている。近年、石材天井埴室墓とともに、平壤地域における初期横穴式石室墓の調査例も増加しており、具体的な検討が可能となった。ここでは各墓制の所属時期を明らかにし、これら三墓制の関係を再検討してみたい。

まず、石材天井埴室墓については、すでに検討したように、墓室形態や紀年銘埴などから穹窿式埴天井単室埴室墓 1BⅢ型式・1BⅣ型式と同時期に併存していることがわかる。1BⅣ型式の楸陵里古墳は片袖羨道をもつ平面長方形の単室埴室墓で、壁面は胴張をもつ。天井は残存していないが、報告者は穹窿式埴天井と推定している。石材の痕跡がみられないので、報告者の推定は妥当と考えられる。この古墳から太康四年（283 年）の紀年銘埴が出土している。石材天井埴室墓で最古の紀年銘が正始九年（248 年）であるから、この埴天井埴室墓は 35 年も後出するのである。また、黄海南道信川郡福隅里古墳群では 2 号墳から泰寧五年（327 年）、5 号墳から建始元年（301 年？）、8 号墳から建武十六年（350 年）の紀年銘埴が出土しており、3 世紀末から 4 世紀中葉にかけて造営された古墳群であると推定されている〔『朝鮮』編集部 1931〕。福隅里古墳群は 10 基の埴室墓から構成されているが、これらの中に埴天井埴室墓が含まれているとすれば、埴天井埴室墓と石材天井埴室墓の造営時期はほぼ重なることになる〔田村 1993〕。このように石材天井埴室墓が埴天井埴室墓に後続しないだけでなく、穹窿式埴天井単室埴室墓 1BⅢ型式・1BⅣ型式と石材天井埴室墓は同時期の墓制である可能性が高くなる。したがって、朝鮮の研究者が主張する埴天井埴室墓→石材天井埴室墓という変化は必ずしも成立しないことがわかる。

一方、初期横穴式石室墓については、1980 年代後半～1990 年代初頭にかけて、新たに 13 基が調査されている〔リスンジン・キムジェヨン 2002〕（表 6）。リスンジンはこれら初期横穴式石室墓をその構造から三部類に分類している〔リスンジン 1990〕。まず、第 1 部類は楽浪洞 29 号墳（図 13-1）のように、羨道のない長方形単室墓で、板石を横架した平天井を有するものである。第 2 部類は長方形の玄室に片袖羨道が付いた平天井単室墓であり、楽浪洞 19・24・25・30・31・34・51・53・54 号墳（図 13-4）がこれに該当する。第 3 部類は羨道と玄室からなる平行三角持送り天井単室墓であり、貞栢洞 101 号墳（図 13-5）のように長方形の玄室に片袖羨道が付いたもの、楽浪洞

表6 平壤地域の初期横穴式石室墓属性表(●:有)

古墳名	型式	墓室長 (cm)	墓室幅 (cm)	羨道長 (cm)	平面形		羨道位置			漆喰		文様埴	副葬品	銅鏡	参考文献
					正 方 形	長 方 形	両 袖	片 袖	左 端	右 端	無				
楽浪洞 29号墳	I	303	100	0		●					●		未報告		リスンジ 1990
南玉里 2号墳	II	302	180	0		●					●		骨小玉, 灰白色土器片, 黒灰色土器片, 灰白色硬質土器片, 漆棺片	内行花文鏡1(四葉座V B)	科学院考古学および民俗学研究所 1959a
楽浪洞 19号墳	III?	230	130	150		●		●			●		鉄棺釘 13, 五銖銭 1		リスンジ 1990
楽浪洞 24号墳	III?	250	150	190		●		●			●		鉄棺釘 16		リスンジ 1990
楽浪洞 25号墳	III?	230	145	305		●		●			●		鉄棺釘 16		リスンジ 1990
楽浪洞 30号墳	III?	210	146	100		●		●			●		金指輪 1, 鉄棺釘 10		リスンジ 1990
楽浪洞 31号墳	III?	214	138	175		●		●			●		鉄棺釘 17		リスンジ 1990
楽浪洞 34号墳	III?	232	148	140		●		●			●		金糸付杏葉状金冠装飾 1, 鉄棺釘 11		リスンジ 1990
楽浪洞 51号墳	III?	230	135	150		●		●			●		鉄棺釘 15		リスンジ 1990
楽浪洞 53号墳	III?	235	140	180		●		●			●		鉄棺釘 13		リスンジ 1990
楽浪洞 54号墳	III?	250	150	180		●		●			●		鉄棺釘 16		リスンジ 1990
貞柏里 159号墳	III	230	150	45		●		●			●	菱形文 S 字文	硬質土器片		梅原 1959
助王里石室墳	III	不明				●		●			不明		鉄釘数個		梅原 1959
貞栢洞 101号墳	IV	200	180	93		●		●			●	●	金銅耳環 1, 鉄棺釘 1		リスンジ 1990
南井里 119号墳	V	290	220	120		●	●				●		耳杯片 1, 盤片 1, 案片 1, 漆器片, 土器片, 五銖銭 3, 大泉五十 1, 棺材片		小場・榎本 1935
楽浪洞 36号墳	V?	280	220	146		●	●				●		銀釧 4, 銀銅指輪 1, 鉄棺釘 17		リスンジ 1990
南寺里 37号墳	V?	280	280	150	●		●				●		鉄棺釘 15		リスンジ 1990

36号墳のように正方形に近い長方形の玄室に両袖羨道が付いたもの、南寺里 37号墳のように正方形の玄室に両袖羨道が付いたものなどがある。基本的に第1部類→第2部類→第3部類と変化したとされ、年代については第1部類が2世紀前半、第2部類が2世紀後半、第3部類が3世紀前半～後半と推定されている。また、羨道形態については明確な羨道をもたないものから片袖羨道を経て両袖羨道へと変化したとされる。このうち、第3部類の楽浪洞 36号墳と南寺里 37号墳については図面が公表されておらず、具体的にどのような天井形態であったのか不明である。また、後述するように年代論に関しても、同意できない部分があり、再検討を要する。

これら新たに報告された横穴式石室墓のほかに、既知の古墳が4基ある。まず、南玉里 2号墳(図 13-2)は 1954年に調査された地上式の長方形横穴式石室墓である[科学院考古学および民俗学研究所 1959a]。墓室南壁に羨門をもつが、羨道はなく、羨門上部には楣石を横架している。壁面は粘板岩で構築し、床面には板石を敷く。壁面および床面には漆喰を塗る。天井は残存しないが、板石で覆った平天井と推定されている。墓室東壁南側に龕をもつ。出土遺物には小玉、内行花文鏡(四葉座 V B 式)、土器片、漆棺片などがある。

貞柏里 159号墳(図 13-3)は 1933年に榎本杜人、梅原末治、田窪真吾によって調査された横

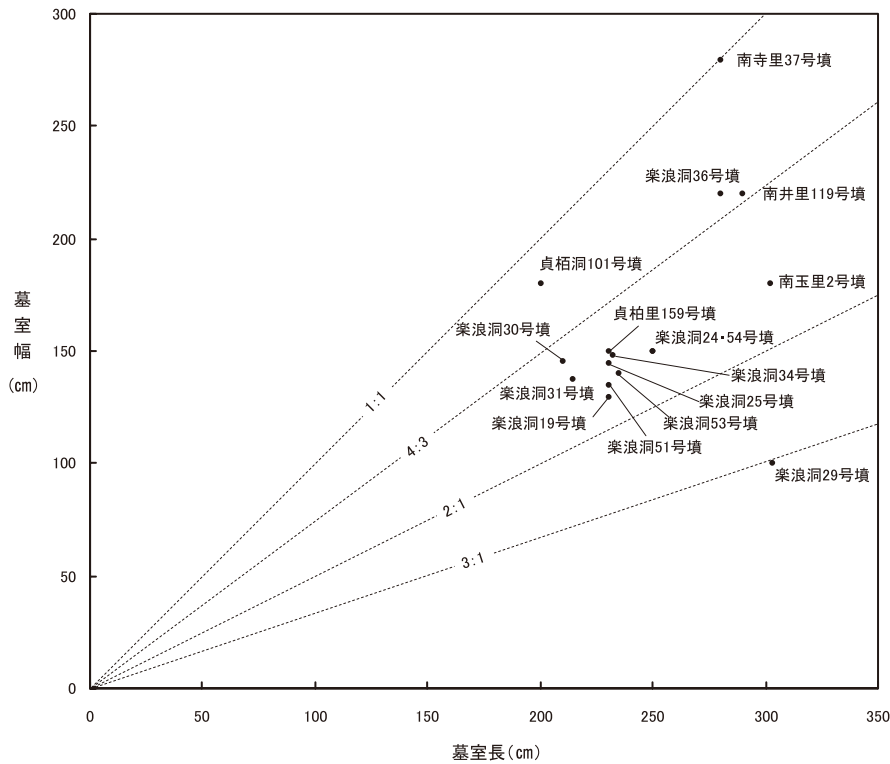


図12 初期横穴式石室墓の墓室長幅比グラフ

穴式石室墓であるが、詳細は未報告である [梅原 1959]。ただし、梅原考古資料に図面と簡単なメモが残されている [梅原考古資料 10073]。それによれば、平面長方形の横穴式石室であり、片袖羨道（玄室左端）を有する。奥壁は1枚の板石を立てて構築し、側壁は割石を平積みしている。壁面には漆喰を塗っている。天井部は残存していないが、羨道上部には楣石が残存している。羨道入口は板石を立てて閉塞している。床面には文様埴を敷いており、埴文様には二重の菱形文とS字文がみられる。盗掘を受けていたため、出土遺物は硬質土器片と人骨片のみであった。石室構造はリスジン分類の第2部類と共通する。

助王里石室墳は1936年に田窪真吾が調査した横穴式石室墓であり [梅原 1959]、梅原考古資料に小泉顕夫が送付した写真と書簡が残されている [梅原考古資料 10108～10110]。それによれば、平面形は長方形を呈し、片袖羨道をもつ（玄室左端）。石室上部は破壊されており、基底部のみ残存する。四壁は割石積みで、羨道は板石を積んで閉塞している。石室床面は粘土を堅く敷き詰めており、石敷きの痕跡はみられない。棺材や鉄釘が出土していることから、木棺を使用していたものと推定されている。遺物は鉄釘以外に人骨片が出土したのみである。その構造からみて、第2部類の石室と同類と考えられる。

南井里119号墳（図13-6）は平面形が正方形に近い長方形の横穴式石室墓で、両袖羨道をもつ [小場・樺本 1935]。玄室天井は失われていたが、羨道上部には2枚の板石を横架し、羨門部は板石で閉塞している。壁面はやや胴張をもち、表面には漆喰を塗る。床面には板石を敷いている。出土遺物は耳杯片、盤片、案片、漆器片、土器片、五銖銭、大泉五十、棺材片などがある。石室の特徴

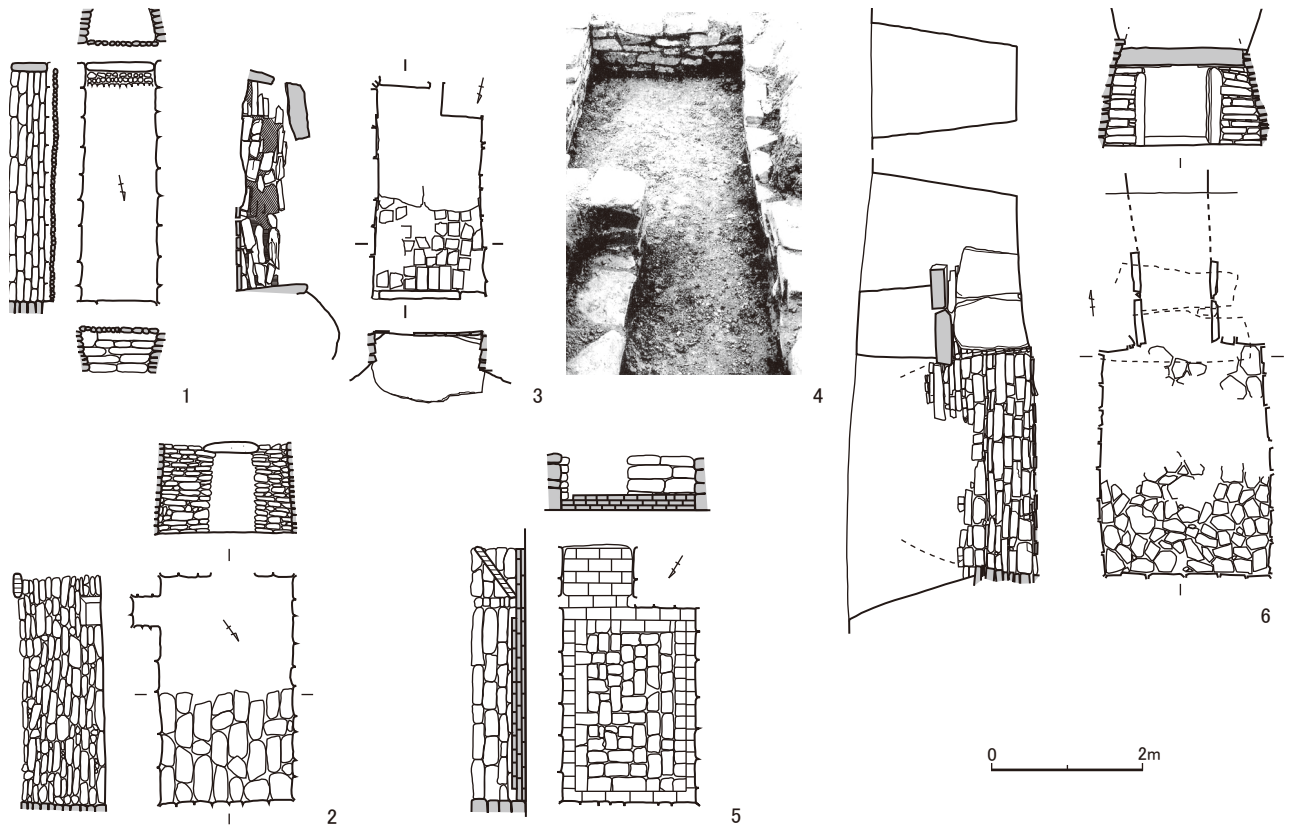


図13 平壤および周辺地域の初期横穴式石室墓

1. 楽浪洞29号墳 2. 南玉里2号墳 3. 貞柏里159号墳 4. 楽浪洞54号墳 5. 貞柏洞101号墳 6. 南井里119号墳

は第3部類の楽浪洞36号墳と類似する。

以上、これまで平壤およびその周辺地域で調査された初期横穴式石室墓について整理してみた。その結果、初期横穴式石室墓の主流をなすのは、玄室の平面形が長方形を呈し、片袖羨道を有するもの（リスンジン分類の第2部類）であることがわかる。その後、平面形が正方形へ、片袖羨道から両袖羨道へと変化したものと推定される。すなわち、墓室平面形と羨道形態を基準に分類することが妥当であることを示している。図12は墓室長と墓室幅を散布図に示したものである。墓室長／墓室幅の比率と羨道形態をもとに、おおむね五型式に分類することが可能である。まず、I型式は墓室長：墓室幅＝3：1で、明確な羨道をもたないものである（リスンジン分類の第1部類に該当）。ただし、類例は楽浪洞29号墳（図13-1）だけであり、不明確な部分が多い。II型式は墓室長：墓室幅＝4：3～2：1で、明確な羨道をもたないものである。壁面には漆喰を塗る。これについても南玉里2号墳（図13-2）のみであり、不確定な部分が残る。III型式は墓室長：墓室幅＝4：3～2：1で、片袖羨道をもつものである（リスンジン分類の第2部類に該当）。羨道はいずれも玄室左端に設置されている。玄室・羨道ともに壁面には漆喰が塗られている。楽浪洞19・24・25・30・31・34・51・53・54号墳（図13-4）、貞柏里159号墳（図13-3）、助王里石室墳が該当し、初期横穴式石室墓では最も数が多い型式である。IV型式は墓室長：墓室幅＝1：1～4：3で、片袖羨道（左端）をもつものである。石室幅が広いので、天井は持送り天井になっていたものと推定される。玄室・

羨道の壁面には漆喰が塗られる。貞栢洞 101 号墳（図 13-5）がこれに該当するが、1 例だけである。V 型式は墓室長：墓室幅 = 1:1 ~ 4:3 で、両袖羨道をもつものである。南井里 119 号墳（図 13-6）、楽浪洞 36 号墳、南寺里 37 号墳がこれに該当する。南井里 119 号墳は天井部が残存していないが、壁面上部に持送りがみられることから、かなり小さな天井石を用いていたものと推定される。したがって、V 型式の天井形態も IV 型式同様に持送り天井であったと考えられる。また、壁面には漆喰を塗布している。

これら平壤地域の初期横穴式石室墓の年代については、紀年銘が出土しておらず、また、副葬品も少ないため、必ずしも明確にはなっていない。ただし、埴室墓との併行関係については、墓室の平面形などから検討が可能である（表 6）。まず、最も類例の多い横穴式石室墓 III 型式から検討してみたい。この III 型式は墓室平面形が長方形を呈し、墓室長：墓室幅の値が 4:3 ~ 2:1 である。これらは穹窿式埴天井単室埴室墓 1B III・1B IV 型式や石材天井単室埴室墓（1C 類）と類似する。また、左端の片袖羨道を有する点や、壁面に漆喰を塗布する点も 1B IV 型式や 1C 類と共通する。横穴式石室墓 III 型式の貞栢里 159 号墳では、床面に菱形文や S 字文などの文様をもつ埴を敷いているが、これらの文様埴は穹窿式埴天井単室埴室墓 1B IV 型式の金鳳里古墳（図 10-10）のものと同類である。したがって、横穴式石室墓 III 型式は埴天井単室埴室墓 1B III・1B IV 型式や石材天井単室埴室墓と併行するものと考えられ、実年代は 3 世紀中葉～4 世紀中葉と推定される。横穴式石室墓 III 型式に先行すると思われる I・II 型式については、類例が少なく併行関係を推定するのは困難である。ただし、II 型式の南玉里 2 号墳では内行花文鏡（四葉座 V B 式）が出土しており、その上限年代は 2 世紀中葉である。四葉座 V B 式のように雲雷文帯をもたない末期の内行花文鏡（四葉座 V A 式、蝙蝠座 I・II 式、円座 III 式）は楽浪里 85 号墳（四葉座 V A 式）、石巖里 255 号墳（蝙蝠座 I 式）、貞栢洞 12 号墳（蝙蝠座 I 式）で出土している。これらは IV 期～V 期の古墳であり、石巖里 255 号墳は穹窿式埴天井単室埴室墓 1B II 型式新段階に該当する。したがって、横穴式石室墓 II 型式はおおむね 1B II 型式新段階と併行する時期、すなわち 2 世紀末～3 世紀前葉ととらえておきたい。おそらく横穴式石室墓 I 型式についても、この年代を大きくさかのぼることはないであろう。横穴式石室墓 III 型式より後出する IV 型式・V 型式についても資料が少なく、不明確ではあるが、IV 型式の貞栢洞 101 号墳では床面に埴室墓と同様の文様埴が敷かれている点、楽浪・帯方郡系の文様埴の使用は 5 世紀以降にはみられない点、半島西北部でこれまで発見されている紀年銘埴の下限が元興三年（404 年）である点、南井里 119 号墳のように漆耳杯や大泉五十を副葬するような古墳も 5 世紀以降にはほとんどみられない点などから、5 世紀初頭を下ることはないと考えられる。おおむね長寿王による平壤遷都（427 年）をその下限年代とみてよいだろう。これらの年代観は前述したリスンジンの主張とは大きく異なるのである。

このように横穴式石室墓 III 型式と埴天井単室埴室墓 1B III・1B IV 型式・石材天井単室埴室墓はほぼ同時期に造営されており、朝鮮の研究者が主張するような埴天井埴室墓→石材天井埴室墓→横穴式石室墓という変化が成り立たないことがわかる。これは横穴式石室墓である貞栢里 159 号墳や貞栢洞 101 号墳で埴室墓と同様な文様埴が使用されていることから裏付けられる。また、横穴式石室墓が I 型式→II 型式→III 型式へと独自に変化したとすれば、横穴式石室墓が石材天井埴室墓から発生したという説も成立しないことになる。横穴式石室墓は埴室墓の最盛期である埴天井単室埴

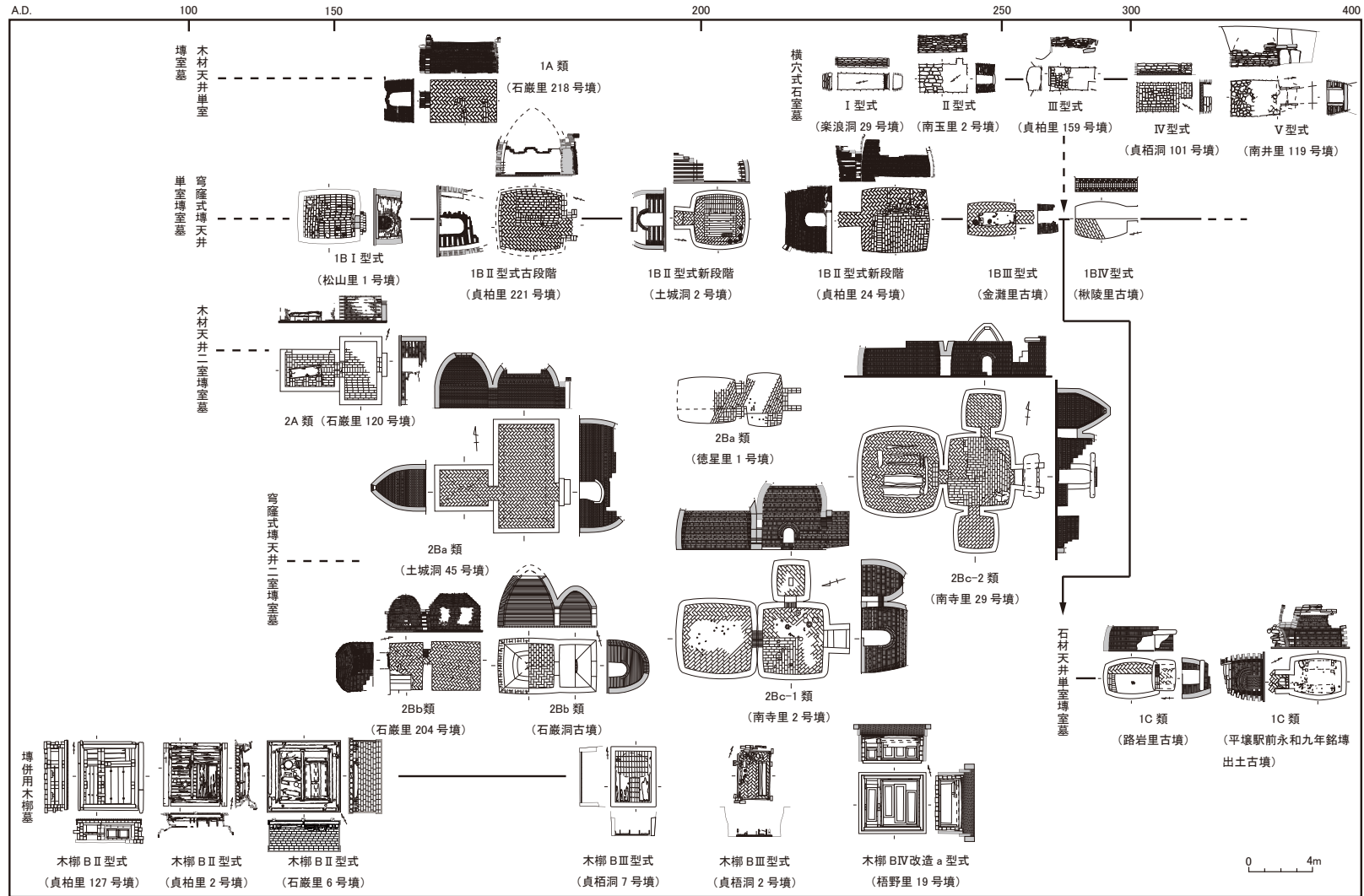


図14 栞浪・帯方郡の塋室墓・塋併用木柵墓・横穴式石室墓編年図



室墓 1B II 型式新段階には平壤地域に出現していた可能性が高く、3 世紀中葉以降その数が増加していったものと推定される。したがって、3 世紀中葉～4 世紀中葉にかけて造営された石材天井単室埴室墓は、埴室墓から横穴式石室墓への過渡的な墓制ではなく、むしろ、横穴式石室墓成立後に石材天井や漆喰塗布など横穴式石室墓の要素を埴室墓に導入することによって成立した墓制であると考えられる。また、平面形が長方形を呈する点、玄室の左側に羨道を設置する点、漆喰を塗布する点などの横穴式石室墓の要素は、埴天井単室埴室墓 1B III・1B IV 型式にもみられ、横穴式石室墓の影響は石材天井単室埴室墓だけでなく、埴天井埴室墓にも及んでいたことがわかる。以上、楽浪・帯方郡の埴室墓石材天井埴室墓・横穴式石室墓の変遷過程を示したのが、図 14 である。

#### ④……………埴室墓の系譜

これまでも楽浪・帯方郡埴室墓の系譜に関しては、いくつかの研究がある。樋口隆康は楽浪郡と遼寧省の埴室墓は共に胴張式であり、両者に関係があるとし [樋口 1975]、田村晃一も楽浪埴室墓が中国東北地区や華北一帯の埴室墓と関連することを指摘している [田村 1980]。筆者も埴室の平面形や埴文様などからみて、楽浪埴室墓と最も類似したものは遼寧地域の埴室墓であることを指摘したことがある [高久 1994]。谷豊信は楽浪埴室墓のようにドーム天井で胴張をもつものが、遼東半島南部と山東半島先端部に分布することを指摘し、これは公孫氏政権の勢力範囲の南部と一致するという一歩進んだ見解を提示している [谷 1996]。このように楽浪埴室墓の系譜については、中国東北地域に求められるという点では見解が一致するが、具体的な比較研究はあまり進んでいないのが現状である。まず必要なことは東北地域でも具体的にどの地域と関連があるのかを明らかにすることである。また、楽浪郡との時期的な併行関係を明らかにし、その変化の過程を比較検討する必要がある。

まず、典型的な楽浪埴室墓に共通してみられる特徴としては、おおむね次の 6 点があげられる。

- ①埴天井埴室墓の場合、高い穹窿天井を有する。
- ②埴室墓の最盛期においては墓室壁面に胴張を有するものが多い。
- ③壁面の構築に平積 3 段立積 1 段工法を用いるものが多い。
- ④二室墓の場合、前室と後室をつなぐ通路が短い。
- ⑤埴室墓の最盛期においては無文埴が少なく、有文埴を多用する。
- ⑥埴文様は、幾何学文埴が主体を占め、特に菱形文が多用される。楽浪郡の周辺で、このような六つの特徴を有する埴室墓が造営される地域は遼東半島のみである。山東半島の埴室墓は前室と後室の間に長い通路を持つ点で、楽浪埴室墓と異なる。東萊郡が置かれていた山東半島の烟台市東留公村墓 [山東省文物管理处 1956] は後漢末頃の二室埴室墓であり、上記①②③⑤⑥の条件はおおむね満たしているが、前室と後室をつなぐ通路が長く、楽浪埴室墓とは形態が異なっている。遼東郡の遼陽地域では三道壕墓群のように後漢中・後期から板石造石室墓が盛行しており [東 1993]、楽浪郡とは墓制が異なる。また、瀋陽付近では瀋州路墓群 [瀋陽市文物考古研究所 2004a]、八家子墓群 [瀋陽市文物考古研究所 2004b]、伯官屯墓群 [瀋陽市文物工作組 1964] のように、後漢中期以降の埴室墓が造営されているが、壁面に胴張をもつものが少ないという違いがある。これらに対し、同じ遼東郡下にあった遼東半島の埴室墓には、大連市宮城子 1・2 号墓 [森ほか 1934] のように楽浪郡の穹窿式埴天井埴室墓と極めて類似したものが存在しており、両地域に密接な関連があったとみてよい。

ただし、遼東半島の埴室墓にも時期的な変化がみられるので、楽浪埴室墓と比較検討するためには、まず編年を行なう必要がある。編年の詳細については、本論の論旨とやや離れるので、別稿にゆずることとし、ここではその概要のみ示すこととする。

遼東半島の埴室墓の場合も楽浪埴室墓と同様に、胴張の出現や平積3段立積1段工法の採用などを手がかりに編年することが可能である(図15)。まず、後漢中期には胴張をもたない単室埴室墓が造営されている。営口市九壘地1号墓(図15-1)[許玉林1993]は平面方形を呈する単室埴室墓であり、東・西・北壁に龕をもつ。墓室内には木槨が設置され、内部に二棺が埋葬されていた。ここから「永和五年(140年)」銘埴(図16-6)が出土しており、後漢中期の絶対年代が分かる唯一の資料である。九壘地3号墓(図15-2)[許玉林1993]も平面方形の単室埴室墓であり、壁面に胴張はなく、平積3段立積1段工法も採用されていないようである。その後、後漢後期になると、大連市南山裡4号墓(図15-3)や南山裡刁家屯五室墓(図15-7)[浜田ほか1933]などのように高い穹窿天井を有する二室墓が造営されるようになり、これと合わせて平積3段立積1段工法が採用されるが、まだ壁面に胴張はみられない。前室と後室をつなぐ通路は、楽浪埴室墓と同様に短い。これらに続いて、後漢末頃になると営城子1・2号墓(図15-12・10)のように胴張を有する穹窿式埴室墓が出現する。これらは高い穹窿式天井を呈し、平積3段立積1段工法が採用され、前・後室の通路が短いという特徴をもっており、楽浪郡における最盛期の埴室墓と極めて類似する。また、遼東半島では埴室墓と併行して、後漢後期に横穴式石室墓(板石積石室墓)も造営されている。瓦房店市馬圈子M2号墓(図15-11)[大連市馬圈子漢魏晋墓地考古隊1993]は二室墓であり、壁面は胴張を有している。構築材は石材であるが、構造は埴室墓と共通する点が多い。

これらの編年は埴文様および副葬品(竈形明器、井戸形明器、倉庫形明器、銅鏡など)により検証が可能である。まず、埴文様については小型化する傾向がみられる(図16)。すなわち、「永和五年」の九壘地1号墓(図16-1~7)では、とても大きく厚みのある埴が使用されており、文様では円文と綾杉文がみられる。後漢後期以降、文様では円文に加え、菱形文埴が採用されはじめる(図16-8~29)。後漢末になると、営城子1号墓(図16-37・38)のように厚さの薄い小型埴が主体を占めるようになり、無文埴が多くなる。副葬明器については、竈形明器が器高の高いものから、低いものへと変化し、井戸形明器が円筒形のものから、壺形のものへ変化する傾向が認められる。倉庫形明器の変化も退化の方向で理解できる(図17)。銅鏡については、大連市前牧城駅M802[旅順博物館1986]で四乳禽獸文鏡が、南山裡刁家屯五室墓で蝙蝠座位至三公鏡(図17-8)が、大連市沙崗子M2号墓[許明綱・呉青雲1991]で方格規矩四神鏡(図17-15)が出土しているが、いずれも後漢後期の鏡であり、埴室墓の編年と矛盾しない。

以上のような遼東半島埴室墓の編年をもとに、楽浪・帯方郡埴室墓の系譜についてまとめておきたい。まず、木材天井埴室墓については、これまで遼東半島や山東半島で数例が知られているが、いずれも時期的な隔たりが大きく、形態も異なっており、直接的な系譜を求めることが困難である[有光・藤井2003]。隣接地域ではないが、漢代の五原郡にあたる内蒙古自治区包頭市の下窩爾吐壕M2号墓[魏堅ほか1998]は、平面T字形の埴室墓であり、楽浪郡の木材天井埴室墓である石巖里120号墳と平面形が類似する。下窩爾吐壕M2号墓は天井部が残存していないため、形態は不明であるが、墓壁に胴張がなく、垂直に立ち上がる点からみて、木材天井であった可能性もあるだろ

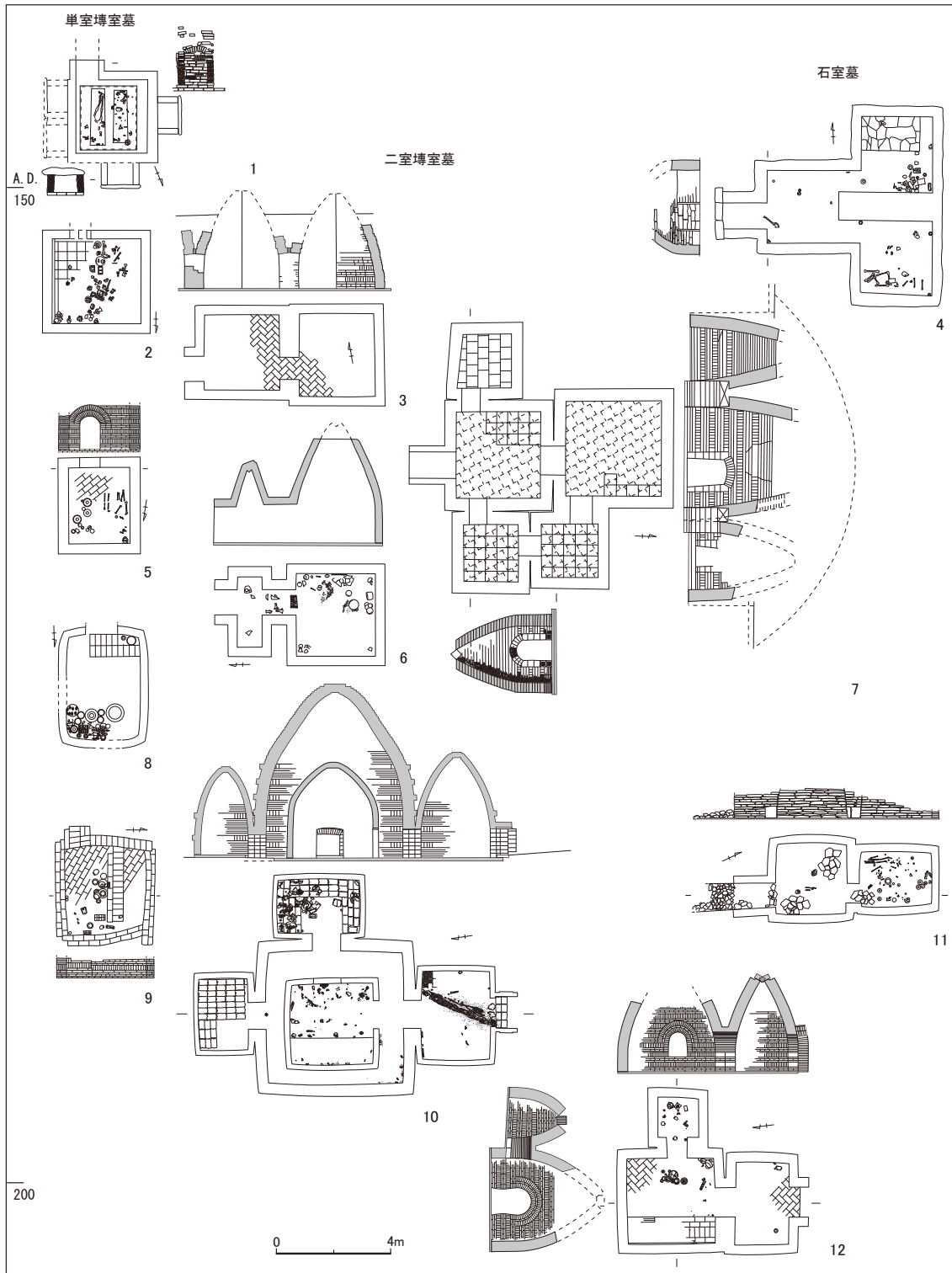


図15 遼東半島における後漢代の埤室墓編年図

1. 九壠地1号墓 2. 九壠地3号墓 3. 南山裡4号墓 4. 菅城子M721号墓 5. 沙崗子M2号墓 6. 牧城駅西古墳 7. 南山裡刁家屯五室墓 8. 前牧城駅M802号墓 9. 董家溝M1号墓 10. 菅城子2号墓 11. 馬圈子M2号墓 12. 菅城子1号墓

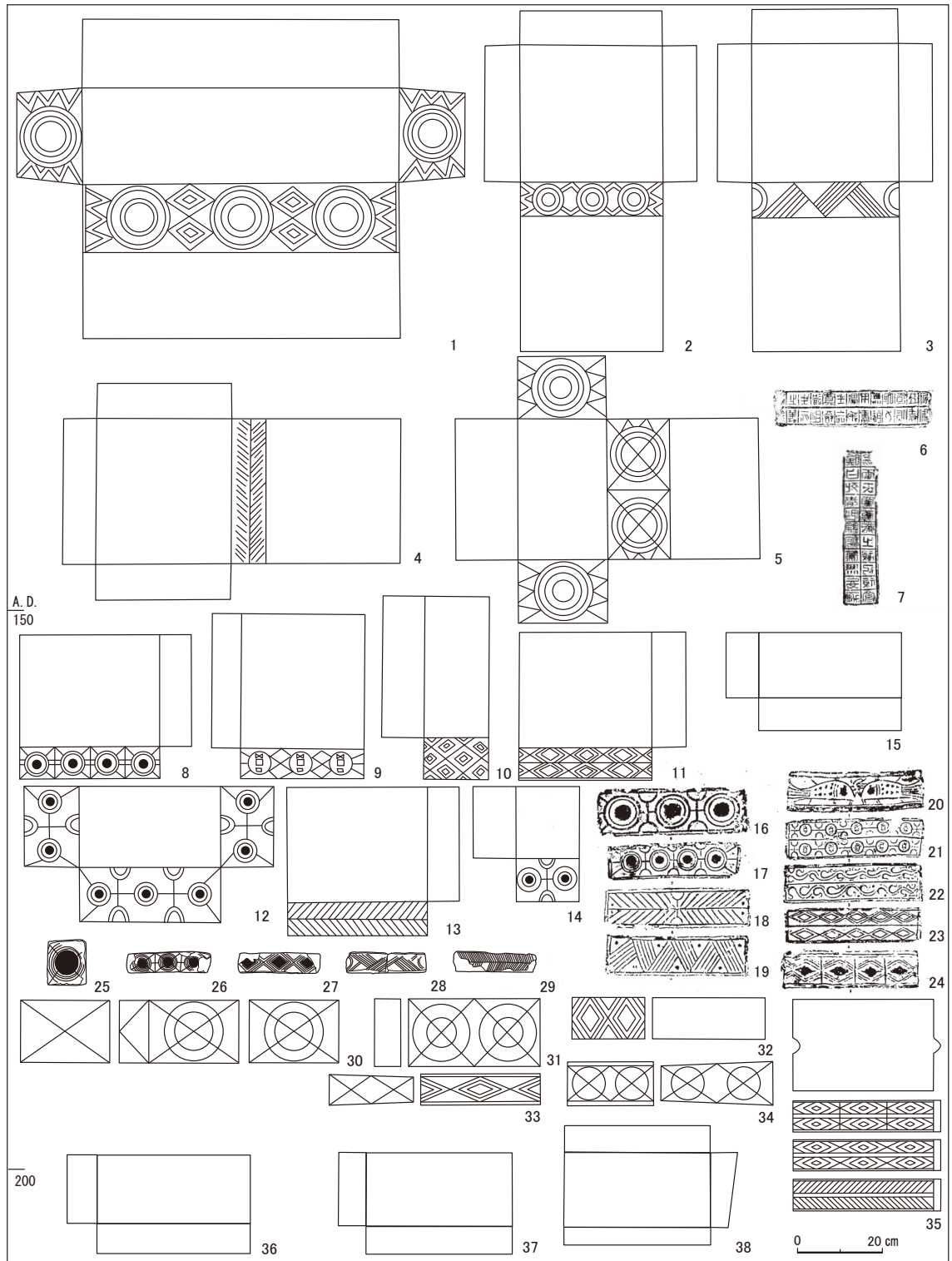


図16 遼東半島墳室墓所用埴変遷図

1~7. 九壠地1号墓 8~14. 九壠地3号墓 15. 南山裡4号墓 16~24. 草房1号墓 25~29. 南山裡刁家屯五室墓  
30~35. 营城子2号墓 36. 薰家溝M1号墓 37~38. 营城子1号墓



<sup>(17)</sup>う。報告では築造時期を新～後漢初頭に比定しているが、壁面の構築に平積3段立積1段工法が採用されていることから、後漢中期以前にさかのぼらせることは難しいのではないだろうか。今後、周辺地域で木材天井塼室墓の類例が増加することを待ちたい。次に、楽浪・帯方郡塼室墓の主流をなす穹窿式塼天井塼室墓については、前述した遼東半島の塼室墓との類似を指摘できる。とくに単室塼室墓である松山里1号墳と南山裡6号墓（後漢末）〔浜田ほか 1933〕、二室塼室墓である石巖洞古墳と営城子1号墓（後漢末）、南井里53号墳と前牧城駅M801号墓（後漢後期～末）〔旅順博物館 1986〕は、それぞれ平面形や天井形態が類似し、前述した遼東半島塼室墓の編年に照らし合わせてみても、楽浪塼室墓と時期的にはほぼ併行する。塼文様についても蓋州市草房1号墓〔許玉林 1993〕で使用された4区画菱形文塼（図16-24）は楽浪郡の塼と共通する。また、平壤地域で3世紀中葉頃から増加する横穴式石室墓については、前述したように遼東半島でも後漢後期から板石積石室墓が造営されている点に注目したい。両者の形態には違いもあるが、塼ではなく石材を用いて墓室を構築するという観念は共通しており、何らかの関連があった可能性がある。このように、楽浪・帯方郡の塼室墓は、遼東半島の塼室墓との共通点が多く、時期的にも併行することがわかる。また、胴張の出現や平積3段立積1段工法の採用など墓室構造の変化や、文様塼の厚さが薄くなり小型化するという変化も、両地域でほぼ併行して起きていることがわかる。したがって、楽浪塼室墓の主な系譜は後漢後期～末の遼東半島の塼室墓に求めることができる。ただし、楽浪・帯方郡の塼室墓には石巖里204号墳のように異系統の塼室墓もいくつかみられることから、その他の地域との関係も無視することはできない。

## ⑤……………塼室墓の出現と消滅の背景

楽浪郡における塼室墓の出現については、公孫氏政権との関係で解釈される場合が多い〔三上 1964, 谷 1996〕。公孫度は中平六年(189年)に遼東太守となると、初平元年(紀元後190年)に遼東侯・平州牧と称して自立し、遼東地域を支配下に置いた〔『三国志』魏書・公孫度伝〕。建安九年(紀元後204年)に公孫度の子である公孫康が後を継ぎ、楽浪郡の屯有県以南の地域を分けて新たに帯方郡を設置した。おそらく、2世紀後葉には楽浪郡は公孫氏政権の支配下に入ったものと推定され、景初二年(238年)に魏の明帝が公孫淵を滅ぼすまでの間、楽浪・帯方郡は公孫氏によって経営が行われた。本稿で明らかにしたように、楽浪郡の典型的な塼室墓である1BⅡ型式の出現がちょうど2世紀後葉に当たる。1BⅡ型式のように胴張の墓室に穹窿式塼天井をもつ塼室墓は遼東半島に系譜があり、これは公孫氏の勢力範囲と重なる。この1BⅡ型式の成立を契機として、楽浪郡では塼室墓が急増する。楽浪郡における塼室墓の普及と公孫氏政権との間には密接な関係があったとみてよい。<sup>(18)</sup>

しかし、楽浪郡における塼室墓の出現は1BⅡ型式の成立よりさらにさかのぼる。すでに検討したように、石巖里120号墳や松山里1号墳など、現在の資料からみても、塼室墓の出現時期は2世紀中葉であり、さらに塼併用木槨墓の貞柏里2号墳や石巖里6号墳の時期に塼室墓が存在したとすれば、1世紀後葉～2世紀前葉までさかのぼる可能性がある。これらの出現の経緯を公孫氏政権と結び付けるには年代的な開きがある。現在までのところ1BⅡ型式よりさかのぼる塼室墓としては

1B I 型式の松山里 1 号墳、木材天井単室塋室墓(1A 類)の石巖里 218 号墳、木材天井二室塋室墓(2A 類)の石巖里 120 号墳があげられる。このうち松山里 1 号墳は遼東半島の塋室墓に系譜を求めることができるので、公孫氏政権の自立時期以前にすでに遼東地域から塋室墓が流入していたことがわかる。すなわち、楽浪郡の衰退期に塋室墓を採用する新興集団が出現したことを示唆しているといえるだろう。

一方、木材天井塋室墓について、朝鮮の研究者は塋併用木槨墓から典型的な穹窿式塋天井塋室墓へと変化する過渡的な墓制として位置づけ、塋室墓の上限年代を示すものとしている [リスンジン 1997]。つまり、木槨墓→塋併用木槨墓→木材天井塋室墓→塋天井塋室墓という継承・発展過程を立証しようとするのである。これに対し、田村晃一は石巖里 120 号墳などの木材天井塋室墓を、典型的な穹窿式塋天井塋室墓より古式ではあるが、塋併用木槨墓から発展したものではなく、それらとは別個の事情によって造営され、短期間のうちに消滅した墓制であると指摘している。すでに明らかにしたように、塋併用木槨墓→塋室墓という変化が成立しないことからみても、田村の指摘は妥当性が高いといえる。ただし、短期間の墓制であったかどうかについては、木材天井塋室墓の資料が少ないため、現段階としては保留せざるを得ない。仮に、まだ発見されていない貞柏里 2 号墳や石巖里 6 号墳段階の塋室墓が木材天井塋室墓であったとすれば、存続時期は 50 年以上となり、決して短期間とはいえないからである。しかし、ある程度長期に渡って造営されたとしても、数的に少ないことから、楽浪古墳の中ではあくまで少数派であったものと考えられる。また、系譜のところでも指摘したように、内蒙古自治区に類例がみられることから、塋天井塋室墓と同様に外来的な墓制といえる。

これまで、塋室墓の終末期の状況については、資料数が少なく不明な点が多かった。すでに明らかにしたように、3 世紀中葉～4 世紀の平壤地域では穹窿式塋天井単室塋室墓、石材天井塋室墓、横穴式石室墓という三墓制が共存していた。ここで注目すべきは横穴式石室墓という、それまで見られなかった新たな墓制の出現である。その出現時期は必ずしも明確ではないが、2 世紀後葉～3 世紀前葉にさかのぼる可能性があり、3 世紀中葉以後に本格的に盛行する。したがって、横穴式石室の出現・盛行の背景については、公孫氏政権による郡県支配、およびその後の魏による二郡の接収とそれに続く西晋による郡県経営と関連するのではないかと考えられる。この時期、楽浪・帯方郡は、約 80 年の間に 3 回も経営主体が交代しており、その間、穹窿式塋天井塋室墓のような外来的な墓制が新たに流入・盛行している。横穴式石室墓についても、郡県の情勢がめまぐるしく変化する中で、周辺地域から流入した墓制ではないだろうか。隣接する遼東半島では後漢後期から板石積石室墓が造営されている点もこれを裏付けている。ただし、リスンジンが主張するように、楽浪郡の横穴式石室墓が高句麗系譜である可能性も依然として残っている [リスンジン 1990]。それは高句麗初期の横穴式石室を伴う方壇階梯石室積石塚に類例が認められるからである。しかし、これらはいずれも 4 世紀以降に編年されており、楽浪郡の横穴式石室墓が若干先行する。また、当然のことながら楽浪郡の横穴式石室墓は積石塚を伴わない。いまだ楽浪郡の横穴式石室墓の系譜をたどれる類例は少なく、今後の課題とせざるを得ない。東潮が指摘するように、楽浪郡の横穴式石室墓と集安地域の石室との系統関係は希薄であり、南井里 119 号墳など最終形態の V 型式の横穴式石室は、平壤地域における 5 世紀代の横穴式石室に引き継がれることなく、塋室墓とともにほぼ 4 世紀

代で消滅してしまうようである [東 1997]。つまり、楽浪郡の横穴式石室墓は郡県末期に現れ、楽浪的な墓制の終焉とともに消滅していった墓制といえる。

最後に、楽浪・帯方郡滅亡前後における穹窿式埴天井単室埴室墓、石材天井埴室墓、横穴式石室墓の分布状況から、それらの造営集団について検討してみたい。まず、穹窿式埴天井単室墓ⅠBⅢ・ⅠBⅣ型式は平壤市寺洞区域金灘里、黄海北道燕灘郡金鳳里、黄海南道信川郡セナル里、黄海南道三泉郡楸陵里、黄海南道殷栗郡雲城里に分布しており、楽浪古墳の中心地域である平壤市楽浪区域ではなく、帯方郡があった黄海地域に多いことがわかる。いまだ、未報告資料も多く、楽浪区域内にこの時期の穹窿式埴天井単室墓が存在すること自体は否定しないが、紀年銘埴の出土状況等からみても、埴室墓の分布の中心は帯方郡地域へと移っている。石材天井埴室墓は平壤市楽浪区域勝利洞（旧・土城洞南西部）・中端洞・柳巢里、寺洞区域梨川里、中区域駅前洞、黄海南道信川郡鳳凰里、黄海南道安岳郡路岩里など、平壤市と黄海南道で発見されている。このうち平壤市では勝利洞のように楽浪古墳の中心地にも存在しているが、楽浪区域中端洞・柳巢里のようにそれまで楽浪古墳があまりみられなかった地域や、寺洞区域梨川里・中区域駅前洞のように楽浪区域から離れた場所に分布している。横穴式石室墓については、平壤市楽浪区域楽浪洞（旧・土城洞北西部）・斗団洞（旧・助王里）・南寺里（旧・南井里）・貞栢洞（旧・貞栢里）・平安南道順川市南玉里などに位置している。その中でも楽浪洞や南寺里など楽浪古墳分布範囲の西側地域に多くみられることがわかる。この地域は木槨墓よりも埴室墓が多く分布し、とくに穹窿式埴天井単室墓ⅠBⅡ型式など最盛期の埴室墓が最も多く築造された地域である。したがって、横穴式石室墓と最盛期の埴室墓の分布範囲はほぼ一致しているといえる。<sup>(19)</sup>このように穹窿式埴天井単室墓ⅠBⅢ・ⅠBⅣ型式、石材天井埴室墓、横穴式石室墓はそれぞれ異なる分布域をもつことがわかる。3世紀前葉まで平壤地域における楽浪古墳の主流を占めていた埴天井埴室墓は、3世紀中葉以降になると、平壤地域では減少し、かわって帯方郡の黄海地域が中心となる。これに対し石材天井埴室墓と横穴式石室墓はいずれも平壤地域に造営されており、前者が後者の影響を受けて成立したことを裏付けている。ただし、同じ平壤地域とはいっても、後者は3世紀前葉まで埴天井埴室墓が多数分布していた楽浪区域楽浪洞・南寺里に造営されているのに対し、後者はその周辺地域に分布している。このように各墓制の分布域が異なり、排他的な位置関係にあるということは、それぞれ異なる集団によって造営された可能性を示唆する。

楽浪・帯方郡滅亡前後における集団の状況については、すでに三上次男によって検討が行われている [三上 1964]。三上は古墳出土の印章、漆器、埴、封泥等の銘文に記された姓をもとに、楽浪および帯方郡における豪族層の状況・変化を考察し、以下の5点を明らかにしている。

①王氏と韓氏が楽浪郡時期および滅亡後にも続いた有力豪族であった。

②王・韓氏以外に、程・張・田・高氏（楽浪前期：楽浪郡設置～帯方郡分置）、呉・貫・杜氏（楽浪後期：帯方郡分置～楽浪・帯方郡滅亡）、孫・佟氏（後楽浪期：楽浪・帯方郡滅亡以後）があるが、王・韓両氏に比べると出現頻度がかなり低い。また、各時期で共通の姓がみられない。

③楽浪前期にみられる王・韓・程・張・田・高諸氏の銘文資料はいずれも大同江南側地域の木槨墓から出土していることから、彼らは楽浪郡朝鮮県、あるいはそれに近い県を本貫としていた。

④楽浪後期になると王・韓氏の姓が、黄海南道信川郡や黄海北道鳳山郡で出土していることから、



両氏は楽浪郡から帯方郡に本貫を移した。

⑤後楽浪期になると、平壤地域に王・韓両氏はみられなくなり、これに変わって新興の姓である佟氏が現れる。一方、黄海道地域では前時期同様、王・韓氏が優勢であった。

上記の指摘のうち、まず④については、3世紀前葉まで平壤地域に集中的に分布していた穹窿式埴天井埴室墓が、3世紀中葉以後は黄海道地域を中心に造営される現象と符合する。3世紀末～4世紀中葉の埴天井埴室墓の可能性が高いとされる黄海南道信川郡福隅里古墳では、4号墳から「韓氏造埴」銘埴が、5号墳から「建始元季韓氏造埴」銘埴が出土していることから、韓氏によって造営された古墳が含まれていることは明らかであり、三上の指摘を裏付けている。したがって、王・韓氏のような楽浪郡在地の土着豪族層が穹窿式埴天井埴室墓を造営していたものと推定される<sup>(20)</sup>。

石材天井埴室墓については、平壤駅前永和九年埴出土古墳から「永和九年三月十日遼東韓玄菟太守領佟利造」銘埴が出土していることから、上記⑤の指摘のように被葬者は郡県末期～滅亡後に新たに現れた新興豪族であったものと推定される。遼東・韓・玄菟太守という称号は東晋永和九年(353年)という楽浪郡滅亡後のものであり、「韓」太守という実際には存在しない名称を用いていることから、実体のないものであろう〔岡崎<sup>(21)</sup> 1964〕。また、黄海南道信川郡鳳凰里1号墳では「守長岑長王君諱卿」,「年七十三 字徳彦東萊黄人也」,「正始九年三月廿日壁師王徳造」銘埴が出土している〔チョンジュノン 1962〕。これらの銘文から被葬者は守長岑長の官職を勤めた王卿であり、現在の山東省にあった東萊郡黄県を本貫とする王氏であったことがわかる。彼が東萊郡黄県の出身であると仮定した場合、正始九年(248年)頃に73歳で没しているのに、公孫氏政権下の時に山東半島から渡ってきた人物である可能性が高く、やはり新興の豪族と考えられる<sup>(22)</sup>。黄海南道安岳郡路岩里古墳では「建武八年西邑太守」「西邑太守張君埴」銘埴が発見されており、被葬者が西邑太守の張氏であったことがわかる。官職の西邑太守については判断材料がないが、後趙の建武八年(342年)という楽浪・帯方郡滅亡後の年号をもっているのに、遼東韓玄菟太守領佟利と同様に虚号の可能性もあるだろう。おそらく佟利のような新興豪族に与えられた称号ではないだろうか。このように、数少ない資料ではあるが、銘文埴の検討から、石材天井埴室墓の被葬者には公孫氏政権時期～楽浪・帯方郡滅亡後に新たに出現した新興豪族が含まれていると考えられる。

横穴式石室墓の被葬者については、銘文資料等がないので、まったく不明である。ただし、横穴式石室墓は楽浪郡の在地の墓制に系譜を引くものではなく、外来的な墓制であるので、石材天井埴室墓の被葬者と同様に遼東半島など周辺地域から楽浪郡へ新たに入ってきた新興豪族層の墓制である可能性が高い<sup>(23)</sup>。しかし、横穴式石室墓と石材天井埴室墓では分布域が異なるので、石材天井埴室墓の被葬者とは系譜の異なる新興豪族ということになる。具体的にどのような性格の集団であるのかは、今後の資料の増加を待って検討する必要があるが、3世紀前葉まで埴室墓が集中的に造営されていた地域に横穴式石室墓が存在しているという事実は見逃すことができない。石材天井埴室墓の被葬者よりも相対的に優位な立場にいた集団である可能性も否定できない。いずれにせよ、穹窿式埴天井単室埴室墓 1BⅢ・1BⅣ型式、石材天井埴室墓、横穴式石室墓の分布状況は、楽浪・帯方郡末期～滅亡後における在り地豪族層と新興豪族層の関係を反映しているのではないかと推定される。

## おわりに

以上、楽浪・帯方郡の塼室墓について、型式分類と編年を行い、関連墓制との関係、系譜、および出現・消滅の背景について考察した。その結果、楽浪塼室墓の主流をなす穹窿式塼天井単室塼室墓(1B類)については、型式分類と編年を行うことができ、実年代もある程度推定することができた。上限・下限年代については、従来提示されていた年代観と大きく変わるものではないが、1BⅡ型式が成立・普及する2世紀後葉～3世紀前葉に大きな画期があることを明らかにした。これを契機として塼室墓が急速に普及するが、その背景としては公孫氏による楽浪郡の支配と帯方郡の分置が想定される。また、これらの系譜については、従来から遼東や山東など公孫氏政権の勢力範囲に求める見解があったが、中国東北における漢墓資料との比較検討の結果、典型的な穹窿式塼天井塼室墓はとくに遼東半島とのつながりが強いことを指摘した。ただし、楽浪・帯方郡の塼室墓は一系統ではないので、今後、個々の塼室墓に対する検討が必要である。

塼併用木槨墓については、木槨墓から塼室墓へと変化する過渡的な墓制ではなく、塼室墓の要素が木槨墓に導入された墓制であることを指摘した。これにともなって、塼併用木槨墓である貞柏里2号墳や石巖里6号墳が造営された1世紀後葉～2世紀前葉に、すでに塼室墓が出現していたのではないかと仮説を提示した。この時期までさかのぼる塼室墓ははまだ楽浪郡で発見されていないが、将来発見される可能性は十分あると考える。

これまで位置付けが不明確であった石材天井塼室墓と横穴式石室墓については、いずれも穹窿式塼天井塼室墓と併行して造営された墓制であることを指摘した。つまり、朝鮮の研究者が主張する塼天井塼室墓→石材天井塼室墓→横穴式石室墓という変化は成立せず、むしろ石材天井塼室墓は横穴式石室墓の天井形態が塼天井塼室墓に導入されたものではないかと推定した。これら三種の墓制はその分布域が異なっており、そこから在地豪族層と新興豪族層の状況を読み取ることができる。すなわち、3世紀中葉以降は平壤地域から黄海道地域へ在地豪族が移動し、これに代わって平壤地域へ新興勢力が流入しており、楽浪郡の体制が大きく変容していった時期と推定される。楽浪・帯方郡末期～滅亡後の状況については、これまで検討が困難であったが、少しずつではあるが資料が増えてきており、漠然としながらも平壤地域の状況が見えてきたのではないかと思う。ただし、横穴式石室墓についてはその上限年代も含めて不明確な部分が残し、その具体的な性格を把握できなかった。朝鮮の研究者は平壤地域の初期横穴式石室墓を高句麗の墓制ととらえるが、仮に高句麗の墓制であったとしたならば、なぜ平壤地域における5世紀代の横穴式石室へ継承されないのか説明が必要である。遼東・山東など高句麗以外の地域を含めて比較検討すべきであると考えられる。

帯方郡の状況についても依然として不明確であるが、近年、路岩里古墳やセナル里古墳など新たな資料が明らかにされた。これら新資料と従来の資料を比較することによって、楽浪郡との違いや、帯方郡の多様性が浮き彫りになりつつある。まだ、これらを具体的に検討する段階には至っていないが、楽浪郡だけでなく、韓・倭との関係を検討するためにも、帯方郡の実態解明が不可欠である。

【付記】 本論文の骨子については、これまで平成16年度九州史学会考古学部会（2004年12月）、第33回韓国上古史学会学術発表大会（2005年10月）で発表を行なっている。また、国立歴史民俗博物館共同研究『『三国志』魏書東夷伝の国際環境』の研究会においても「楽浪郡後期の墓制」（2005年9月）、「楽浪・帯方郡埴室墓の系譜」（2008年1月）として発表している。本論文はこれらの学会・研究会での発表内容・質疑応答をもとにして、まとめなおしたものである。発表の席上、ご教示いただいた方々にお礼申し上げたい。また、本共同研究では2006・2007年の2回にわたって、中国東北部を踏査することができた。その際、営城子漢墓、九壘地漢墓、遼陽漢墓など遼東地域の漢墓資料を初めて実見することができ、その結果、これまで懸案となっていた楽浪・帯方郡埴室墓の系譜問題を検討することができた。踏査の機会を与えていただいた国立歴史民俗博物館に感謝申し上げたい。また、本共同研究と併行して、平成17・18年度科学研究費補助金（若手研究（B））「東洋文庫所蔵梅原考古資料等を用いた楽浪古墳に関する基礎的研究」を行なっており、本論文にはこの成果の一部が含まれている。したがって、本論文の要約版を『楽浪埴室墓の研究－平成17（2005）年度～18（2006）年度科学研究費補助金（若手研究（B））研究成果報告書（課題番号17720198）－』に掲載している。なお、この報告書には付録として「楽浪郡・帯方郡埴室墓実測図集成」、「楽浪郡・帯方郡埴室墓データベース」を掲載しているので、本論文と合わせて参照していただきたい。また、梅原考古資料の掲載を許可していただいた財団法人東洋文庫に、お礼申し上げたい。

## 註

(1)——楽浪埴室墓の研究史については高久2007を参照。

(2)——楽浪郡には貞栢洞14・16号墳や梨川里2号墳のように埴で床面や壁面を構築し、竪穴式構造を持つものも存在するが、これらは埴室墓と区別して埴槨墓と呼ぶことにする。これは朝鮮の研究者がいうピョクトルクァクムドムに当たる。

(3)——同じく木材天井をもつ単室墓として、楽浪洞105・206号墳、貞栢洞271・975号墳、土城洞874号墳などが知られているが[リスンジン1997]、これらは玄門・羨道をもたない竪穴式構造であるので、埴槨墓に当たるものと推定される。

(4)——この他に木材天井二室埴室墓の可能性のあるものとして梧野里25号墳があげられるが、前室と後室の床面の高さが異なる点や、前室幅が後室幅より狭い点など、その他の二室埴室墓と大きく異なっている。また、前室とされる部分に明確な羨門が確認されていないことなどからみて、後室とされる部分は主埴槨であり、前室とされる部分はその副埴槨であると推定される。したがって、梧野里25号墳は横口をもたない木材天井埴槨墓である可能性が高い。詳細は未報告ではあるが、同様な竪穴式木材天井埴槨墓として楽浪洞105・206号墳、

貞栢洞271・975号墳、土城洞874号墳などがある。

(5)——関野ほか1915に掲載されている図面には壁面の埴積が表現されていないが、関野1914および鄭仁盛2005に掲載された図面には平積みされた埴が表現されている。関野ほか1915に掲載されている写真からも平積みの様子がうかがえる。ただし、埴の長側面を内側に向けて平積みするのではなく、小口面と長側面を交互に積み上げている。

(6)——漢鏡の分類・編年・年代については、基本的に岡村秀典の一連の研究に依拠した[岡村1992・1993]。

(7)——埴の文様は長側面や小口面に付けられているが、検証で用いる文様はすべて長側面に付けられたものである。長側面の文様の多くは、3～6個の長方形区画に分割され、その中に文様が入れている。その中でも4区画に分割されたものが最も多く、主流をなす。区画の面積が違えば、その中に入れられる文様の形状も変わってしまうので、検証では埴文様の主体を占める4区画文様を主な対象とした。

(8)——菱形文の精文と粗文を区別する基準としては、以下の3点があげられる。

①菱形が区画の中に納まっているかどうか。

②菱形が歪んでいないかどうか。

③菱形の四つの角がしっかりと表現され、区画線に接しているかどうか。

(9)——時期が下るにつれ、文様磚の厚さが薄くなるという変化について、近年、李銀眞による批判がある〔李銀眞・高正龍・朴辰一 2007〕。李銀眞は楽浪・帶方郡の紀年銘磚を検討した結果、年代と磚の厚さに明確な相関関係は認められないとする。また、紀年銘磚に付された文様についても、一概に精文から粗文へと退化するとは言いきれないと指摘する。確かに、高久 1993 では紀年銘磚を磚の形態変化の検証に用いたが、紀年銘磚は特殊な磚であり、側面に銘文を入れるという制約からか、張撫夷墓磚のように時期が下っても厚みを維持するものが存在すると、現在は認識している。ただし、これまで東洋文庫所蔵梅原考古資料の拓本や国内大学所蔵の文様磚を実見する機会を通じて、通常の文様磚の場合は、やはり厚さに時期的変化が認められ、文様も退化することを確認している。とくに、磚室墓が急増する 1B II 型式新段階に磚文様の退化が急速に進むようである。また、後述するように、楽浪・帶方郡と密接な関係をもつ遼東の磚室墓においても、共通した文様磚の形態変化が認められるのではないかと考えている。李銀眞は、新しい紀年銘をもつ磚にも精文が入れているものがあると指摘するが、これらはいずれも長側面の 3 区画文様や短側面に入れられた文様である。高久 1993 で分類対象とした磚文様はすべて長側面に入れられたものであり、本稿ではさらに 4 区画文様に限定した。むしろ、短側面の文様も検討すべきではあるが、長側面と短側面とではスペースに違いがあり、付される文様も異なっている。また、紀年銘磚は銘文を入れた特殊な磚であるので、時期が下っても厚みをもつものがみられ、この場合、複雑な文様を入れることも可能となる。したがって、特別に作られた紀年銘磚と大量生産された通常の文様磚の文様変化は区別して検討すべきであると考えられる。

(10)——貞梧洞 31 号墳出土の興平二年銘磚以外に、楽浪郡初期の紀年銘磚として、黄海北道鳳山郡唐土城（智塔里土城）出土の光和五年（182 年）銘磚と、平壤市楽浪土城出土の興平二年（195 年）銘磚が知られている〔榎本・野守 1933, 梅原 1933〕。いずれも古墳ではなく土城出土のものであるが、銘文などからみて磚室墓で使用される磚と同一のものと考えられる。磚の厚さ／長さの値は、前者が 0.16 で、後者が 0.17 である。銘文磚であるので、前述したように文様磚と一概に比較はできないが、1B II 型式古段階～新段階のものと類似する。

(11)——石巖里 218 号墳出土の盤龍鏡は岡村秀典の分類

によれば、外区文様が鋸 c、主文が龍 1 + 虎 1（小像なし）の 2b、断面形態 3、銘文 K の 2 句であるので II B 式に該当し、かなり文様が簡略化された末期の型式である。その出現年代は 2 世紀前半とされる。楽浪郡では 20 基の古墳から盤龍鏡が出土しているが、そのうちの 15 基が磚室（槨）墓である。また、5 基の木槨墓より出土した盤龍鏡はいずれも I A・I B・II A 式など II B 式に先行する型式である。盤龍鏡出土の磚室墓の中には方形墓室に羨道をもつ典型的な磚室墓も含まれていることから、楽浪郡における盤龍鏡 II B 式の中心時期は磚室墓の最盛期とほぼ重なるものと考えられる。石巖里 218 号墳の報告書では築造年代を 2 世紀前半と推定しているが、羨道形態、文様磚、銅鏡などからみて、2 世紀後半まで下るものと推定される。

(12)——磚併用木槨墓は、表 5 に示した古墳以外に貞梧洞 191 号墳、楽浪洞 7 号墳、貞梧洞 53 号墳、土城洞 24 号墳などがある。

(13)——楽浪木槨墓の型式分類については高久 1994 による。

(14)——これまで画文帯神獸鏡の出土が報告されている楽浪古墳は、楽浪洞 9（磚室墓）・57 号墳（磚室墓）、梧野里 19 号墳（木槨墓）、石巖里 293 号墳（木槨墓）、貞梧洞 130（磚室墓）・168 号墳（磚室墓）、貞梧洞 17 号墳（磚室墓）、貞柏里 3 号墳（木槨墓）、土城洞 23（磚室墓）・46 号墳（磚室墓）である。

(15)——菱形文などを付けた文様磚は、漢代木槨墓の黄腸題湊を模したものとされ〔駒井 1936〕、磚室墓用に製作された磚であると考えられる。もちろん土城でも使用されてはいるが、楽浪土城 B' - B" トレンチでは文様磚を磚敷として使用しており、文様面をみることはほとんどできない。また、楽浪土城 G トレンチの磚築遺構の場合も文様磚を平積みしているにも関わらず、文様のある長側面が表に出ていないものが多い〔駒井 1965, 谷 1983〕。いずれの場合も文様磚の効果が十分に発揮されているとはいえず、磚室墓の磚を転用したものと推定される。楽浪土城では D トレンチでも磚敷遺構が検出されているが、こちらの場合は 33 × 25cm の幅の広い無文磚を使用している。磚室墓で使用する磚とは明らかに形態が異なっており、これらが磚敷などの建築用に製作された磚であると考えられる。したがって、菱形文などの文様磚は、磚室墓の存在を示す証拠になるものといえる。

(16)——楽浪木槨墓の編年については、〔高久 1993・1995・2000・2002〕を参照。なお、本稿において磚併用

木槨墓と埴室墓の位置づけを若干修正した。

(17)——報告ではアーチ型埴天井であると推定されている。

(18)——公孫度が遼東を支配下に置くと、中国本土から難を逃れるため、多くの一般民衆や人士が山東半島から海路で遼東に流入したとされる〔松田 1986〕。これらの一部は公孫氏支配下の楽浪・帯方郡にも流入したと推定され、新たな墓制の採用の一契機となった可能性がある。後で述べる鳳凰里 1 号墳の被葬者である王卿もこのような人物の一人ではなかっただろうか。

(19)——楽浪洞と土城洞一帯の古墳群では、埴室墓と初期横穴式石室が 3～5m 間隔で数多く混在しているという〔バククェンフン 2002〕。

(20)——ただし、これは穹窿式埴天井埴室墓の被葬者すべてが、楽浪王氏のように郡県設置以来の土着豪族であるということの意味するのではない。新興豪族の中にも穹窿式埴天井埴室墓を造営する集団があったと推定される。

(21)——「遼東韓玄菟太守」については、三郡太守とする見解が一般的だが、最初の「遼東」を称号ではなく出身地とみる見解もある〔窪添 1981〕。仮に後者の見解に従うならば、この被葬者の佟利は郡県末期～滅亡後に遼東地域から楽浪郡に流入してきた新興豪族ということに

なる。この古墳は楽浪古墳の分布の中心地である大同江南岸ではなく、北岸の平壤駅前という離れた場所に位置していることからみても、新たに外部から入ってきた豪族である可能性が高い。

(22)——呉永賛は帯方郡で埴室墓を造営した集団を、鳳凰里 1 号墳の被葬者のような遼東系・山東系の新来漢人と、楽浪郡から流入した楽浪人、そして在地の漢系集団と古朝鮮系集団であったととらえている〔呉永賛 2006〕。本稿ではこれら造営集団の違いが埴室墓の型式差として現れているのではないかと考えた。

(23)——呉永賛は平壤地域の横穴式石室墓を高句麗系の墓制であるとした上で、その出現を楽浪郡滅亡以後ととらえ、従来どおりの埴室墓が造営され続ける帯方郡地域との違いを指摘する〔呉永賛 2006〕。この時期の楽浪郡と帯方郡の墓制の違いがみられることは確かであり、楽浪郡と帯方郡の支配勢力の違いが、後の高句麗による支配方式の違いにつながるとした点は卓見であるが、平壤地域の横穴式石室墓は楽浪郡存続時期から存在していた可能性が高く、滅亡以後も継続して造営された墓制であると考えられる。したがって、楽浪郡地域も帯方郡地域と同様に、滅亡以後ただちに高句麗の墓制に転換するのではなく、滅亡前に流入してきた新興集団がある程度存続し、従来の墓制が継続していたものと考えられる。

## 参考文献（五十音順）

〈日本文〉

- 東潮 1993 「遼東と高句麗壁画－墓主凶像の系譜－」『朝鮮学報』第 149 集（『高句麗考古学研究』吉川弘文館、1997 年所収）
- 東潮 1997 『高句麗考古学研究』吉川弘文館
- 有光教一・藤井和夫 2003 『朝鮮古跡研究会遺稿Ⅲ－平壤石巖里第 218 号墳・平壤貞柏里第 24 号墳発掘調査報告 1943－』ユネスコ東アジア文化研究センター・財団法人東洋文庫
- 井内功 1976 『朝鮮瓦埴図譜Ⅰ楽浪帯方』井内古文化研究室
- 今西龍 1910 「朝鮮平壤郡大同江南の古墳」『東京人類学会雑誌』第 25 巻第 293 号
- 今西龍 1912 「大同江南の古墳と楽浪王氏との関係」『東洋学報』第 2 巻第 1 号
- 梅原末治 1933 「朝鮮北部出土紀年埴集録」『支那学』第 7 巻第 1 号
- 梅原末治 1934a 「貞柏里第二百十九号墳」『昭和八年度古跡調査概報』朝鮮古跡研究会
- 梅原末治 1934b 「貞柏里第二百二十一号墳」『昭和八年度古跡調査概報』朝鮮古跡研究会
- 梅原末治 1934c 「貞柏里第二百二十七号墳」『昭和八年度古跡調査概報』朝鮮古跡研究会
- 梅原末治 1936a 「南井里第五十三号墳」『昭和十年度古跡調査概報』朝鮮古跡研究会
- 梅原末治 1936b 「道濟里第五十号墳」『昭和十年度古跡調査概報』朝鮮古跡研究会
- 梅原末治 1946 『朝鮮古代の文化』高桐書院
- 梅原末治 1959 「楽浪の墓制」『朝鮮古文化綜鑑』第 3 巻、養徳社
- 梅原末治 1969 「日韓併合の期間に行われた半島の古跡調査と保存事業にたざざわった－考古学徒の回想録」『朝鮮学報』第 51 集
- 岡崎敬 1964 「安岳第三号墳（冬寿墓）の研究－その壁画と墓誌銘を中心として－」『史淵』第 93 集
- 岡村秀典 1992 「浮彫式獣帯鏡と古墳出現期の社会」『出雲における古墳の出現を探る－松本古墳群シンポジウムの

記録- 出雲考古学研究会

- 岡村秀典 1993 「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集
- 小場恒吉 1935 「将進里第四十五号墳」『昭和九年度古跡調査概報』朝鮮古跡研究会
- 小場恒吉 1936 「石巖里第二百五十五号墳」『昭和十年度古跡調査概報』朝鮮古跡研究会
- 小場恒吉・榎本亀次郎 1935 『楽浪王光墓』古跡調査報告第二, 朝鮮古跡研究会
- 榎本亀生 1938 「楽浪近況」『考古学』9・9
- 榎本杜人 1951 「横穴式石室の年代について-楽浪末期の古墳に関連して-」『古代学研究』第5号(『朝鮮の考古学』同期舎, 1980年所収)
- 榎本亀次郎・野守健 1933 「永和九年在銘埴出土古墳調査報告」『昭和七年度古蹟調査報告』第一冊, 朝鮮総督府
- 窪添慶文 1981 「楽浪郡と帯方郡の推移」『東アジア世界における日本古代史講座』第3巻, 学生社
- 黒板勝美 1917 「黄海道(殷栗郡, 鳳山郡)平安南道(大同郡, 龍岡郡, 安州郡)平安北道(義州郡, 龍川郡, 定州郡)史跡調査報告」『大正五年度古跡調査報告』朝鮮総督府
- 小泉顕夫・澤俊一 1934 『楽浪彩簾塚』古跡調査報告第一, 朝鮮古跡研究会
- 考古学雑誌編集部 1935 「新聞所見-助王里に於ける楽浪遺跡の発掘」『考古学雑誌』第25巻第8号
- 駒井和愛 1936 「漢代墳墓の埴壁と題湊」『人類学雑誌』第51巻第2号
- 駒井和愛 1965 『楽浪郡治址』東京大学文学部考古学研究室考古学研究第3冊, 東京大学
- 関野貞 1914 「朝鮮に於ける楽浪帯方時代の遺跡」『人類学雑誌』第29巻第10号
- 関野貞 1936 『考古学講座 楽浪帯方両郡の遺跡及遺物』雄山閣
- 関野貞ほか 1909 『韓紅葉』度支部建築所
- 関野貞ほか 1914 『朝鮮古跡調査略報告』朝鮮総督府
- 関野貞ほか 1915 『朝鮮古跡図譜』1, 朝鮮総督府
- 関野貞ほか 1925 『楽浪郡時代ノ遺跡(図版)』古跡調査特別報告第四冊, 朝鮮総督府
- 関野貞ほか 1927 『楽浪郡時代ノ遺跡(本文)』古跡調査特別報告第四冊, 朝鮮総督府
- 高久健二 1993 「楽浪墳墓の編年」『考古学雑誌』第78巻第4号
- 高久健二 2000 「楽浪郡と弁・辰韓の墓制-副葬品の組成と配置の分析を中心に-」『考古学から見た弁・辰韓と倭』九州考古学会・嶺南考古学会
- 高久健二 2002 「楽浪郡と三韓」『韓半島考古学論叢』すずさわ書店
- 高久健二 2007 『楽浪埴室墓の研究-平成17(2005)年度~18(2006)年度科学研究費補助金(若手研究(B))研究成果報告書(課題番号17720198)-』埼玉大学教養学部
- 田窪真吾・梅原末治 1938 「楽浪梧野里二五号墳の調査」『昭和十二年度古跡調査報告』朝鮮古跡研究会
- 谷豊信 1983 「楽浪土城址の発掘とその遺構-楽浪土城研究その1-」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第2号
- 谷豊信 1996 「楽浪郡と漢代の山東-弥生時代史の一背景-」『平成8年秋季特別展 開館5周年記念 中国 仙人のふるさと-山東省文物展-』大阪府立弥生文化博物館
- 田村晃一 1980 「平壤(ピョンヤン)周辺における古墳調査の現況と問題点」『青山史学』第6号(『楽浪と高句麗の考古学』同成社, 2001年所収)
- 田村晃一 1993 「朝鮮半島北部の埴室墓について」『論苑考古学』天山舎(『楽浪と高句麗の考古学』同成社, 2001年所収)
- 『朝鮮』編集部 1929 「昭和三年度古蹟調査事務概要」『朝鮮』第171号
- 『朝鮮』編集部 1931 「昭和五年度古蹟調査」『朝鮮』第197号
- 鄭仁盛 2005 「関野貞と楽浪遺跡の調査研究」『関野貞アジア踏査』東京大学出版会
- 東洋学術協会 1966 『梅原考古資料目録 朝鮮之部』東洋文庫
- 東洋文庫古代史研究委員会 1989 『東洋文庫所蔵梅原考古資料目録 日本之部・朝鮮之部・中国之部』東洋文庫
- 鳥居龍藏 1910a 「洞溝に於ける高句麗の遺跡と遼東に於ける漢族の遺跡」『史学雑誌』第21編第5号
- 鳥居龍藏 1910b 『南満洲調査報告』東京帝国大学(『鳥居龍藏全集』第十巻, 朝日新聞社, 1976年所収)
- 中村春寿 1968 「楽浪古墳の築造について-特に封土の問題に関して-」『帝塚山考古』No.1
- 野守健ほか 1935 『平安南道大同郡大同江面梧野里古墳調査報告』昭和五年度古跡調査報告第一冊, 朝鮮総督府
- 浜田耕作ほか 1933 『南山裡-南満洲老鉄山麓の漢代墓-』東方考古学叢刊第三冊, 東亜考古学会
- 原田淑人・田澤金吾 1930 『楽浪-五官掾王旻の墳墓-』東京帝国大学文学部, 刀江書院
- 樋口隆康 1975 「楽浪文化の源流」『歴史と人物』9月号(『展望アジアの考古学-樋口隆康教授退官記念論集-』新潮社, 1983年所収)

- 藤田亮策 1930「昭和四年古蹟調査の概要」『朝鮮』第177号  
 藤田亮策 1931「朝鮮に於ける古蹟の調査及び保存の沿革」『朝鮮』第199号  
 松田徹 1986「遼東公孫氏政権と流入人士」『麗澤大学紀要』第41巻  
 三上次男 1964「楽浪郡社会の支配構造」『朝鮮学報』第30集（『古代東北アジア史研究』吉川弘文館、1966年所収）  
 森修ほか 1934「営城子—前牧城驛付近の漢代壁畫軀—」『東方考古学叢刊』第四冊、関東庁博物館  
 谷井濟一 1914 a「黄海道鳳山郡ニ於ケル漢種族ノ遺跡」『朝鮮古跡調査略報告』朝鮮総督府  
 谷井濟一 1914 b「朝鮮平壤附近に於ける新たに発見せられたる楽浪郡の遺跡（上）」『考古学雑誌』第4巻第8号  
 谷井濟一 1920「黄海道鳳山郡・平安南道順川郡及平安北道雲山郡古跡調査略報告」『大正六年度古跡調査報告』朝鮮総督府  
 李銀眞・高正龍・朴辰一 2007「楽浪・帯方埴の集成と法量的検討」『朝鮮古代研究』第8号

〈韓国・朝鮮文〉

- アンチュンソン 2006「勝利洞 86号埴室発掘報告」『朝鮮考古研究』2006-4  
 アンピョンチャン・ホンウォンピョ 1990「新たに発見された楸陵里埴室」『朝鮮考古研究』1990-1  
 科学院考古学および民俗学研究所 1959a「大同江および載寧江流域古墳発掘報告」『考古学資料集』2、科学院出版社  
 科学院考古学および民俗学研究所 1959b「台城里古墳群発掘報告」『遺跡発掘報告』5、科学院出版社  
 キムヨンガン（金用環）ほか 1964「金灘里原始遺跡発掘報告」『遺跡発掘報告』10集、社会科学院出版社  
 キムジェオン・コヨナム 2002a「最近発掘された石材天井埴室墓」『朝鮮考古研究』2002-3  
 キムジェオン・コヨナム 2002b「石材天井埴室墓について」『朝鮮考古研究』2002-4  
 呉永賛 2006『楽浪郡研究—古朝鮮系と漢系の種族融合を通じた楽浪人の形成—』四季節出版社  
 洪漕植 1993「楽浪埴室墓に対する一考察」『釜大史学』第17集（吉井秀夫・訳「同」『古文化談叢』第32集）  
 社会科学院考古学研究所 1977『古朝鮮問題研究論文集』社会科学出版社  
 社会科学院考古学研究所 1983a「楽浪区域一帯の古墳発掘報告」『考古学資料集』6、科学、百科事典出版社  
 社会科学院考古学研究所 1983b「各地古代遺跡調査報告」『考古学資料集』6、科学、百科事典出版社  
 社会科学院考古学研究所田野工作隊 1978『考古学資料集』5、科学、百科事典出版社  
 新義州博物館 1961「平安北道博川郡徳星里埴室墓発掘簡略報告」『文化遺産』1961-5  
 ソンスホ 2001『高句麗古墳研究』社会科学出版社  
 高久健二 1994「楽浪埴室の埋葬主体部に対する研究—楽浪社会構造の解明—」『考古歴史学志』第10集（「楽浪埴室の埋葬主体部—楽浪社会構造の解明—」『古文化談叢』第35集、1995年）  
 高久健二 1995『楽浪古墳文化研究』学研文化社  
 チャダルマン 2003「梨川里1号、2号埴室墓について」『朝鮮考古研究』2003-3  
 チャン Cholman 1994「新たに明らかになった金鳳里埴室墓」『朝鮮考古研究』1994-4  
 《朝鮮遺跡遺物図鑑》編纂委員会 1989『朝鮮遺跡遺物図鑑』2、《朝鮮遺跡遺物図鑑》編纂委員会  
 チョジュノ（田壽農）1962「信川から帯方郡長岑長王卿の古墳発見」『文化遺産』1962-3  
 チョンベグン（鄭白雲）1958「江南猿岩里原始遺跡発掘報告書」『文化遺産』1958-1  
 バククァンフン 2002「平壤一帯の埴室墓に反映された高句麗文化の影響」『朝鮮考古研究』2002-4  
 ハンインドク（韓仁徳）1986「平壤一帯の埴室墓の構造型式とその変遷」『朝鮮考古研究』1986-2  
 ハンインドク 1988「平壤一帯の埴室墓の年代について」『朝鮮考古研究』1988-4  
 ハンインドク 1989「平壤一帯の埴室墓は同穴合葬木槨墓の継承」『朝鮮考古研究』1989-1  
 ハンインドク 1990「平壤一帯の埴室墓に関する研究」『考古民俗論文集』12、科学百科事典総合出版社  
 ハンインドク 1995「西北朝鮮の埴室墓の性格について」『朝鮮考古研究』1995-4  
 ハンインドク 2003「路岩里石材天井埴室墓について」『朝鮮考古研究』2003-3  
 ファンギドク（黄基徳）・バクチンウク（朴晋煜）・チョンチャニョン（鄭燦永）1971「紀元前5世紀～紀元3世紀の西北朝鮮の文化」『考古民俗論文集』3、社会科学出版社  
 ユンソンハク 2004「黄海南道信川郡セナル里埴室墓発掘報告」『朝鮮考古研究』2004-4  
 李榮勲ほか 2001「鳳山 養洞里 埴室墓」日帝強占期資料調査報告2、国立中央博物館  
 リスンジン（李淳鎭）1990「楽浪区域一帯の高句麗石室封土墳について」『朝鮮考古研究』1990-4（呂南喆・訳 1993「同」『高句麗・渤海と古代日本』雄山閣）  
 リスンジン 1997『平壤一帯の楽浪古墳に対する研究』社会科学出版社  
 リスンジン・キムジェオン 2002『楽浪区域一帯の古墳発掘報告』社会科学出版社

---

リスンジン・チャンジュヒョップ 1973 『古朝鮮問題研究』 社会科学出版社（金亨圭・呂南喆・金洪圭・部分訳  
1975・1976「馬韓の文化」『朝鮮学術通報』 Vol. X II No. 2～6・Vol. X III No. 1）

〈中国文〉

魏堅ほか 1998 『内蒙古中南部漢代墓葬』 中国大百科全書出版社  
許玉林 1993 「遼寧蓋県東漢墓」『文物』 1993-4  
許明綱・呉青雲 1991 「遼寧大連沙崗子発現二座東漢墓」『考古』 1991-2  
山東省文物管理处 1956 「山東福山東留公村漢墓清理簡報」『考古通訊』 1956-5  
瀋陽市文物考古研究所 2004a 「遼寧瀋陽瀋州路東漢墓發掘簡報」『北方文物』 2004-3  
瀋陽市文物考古研究所 2004b 「遼寧瀋陽八家子漢魏墓葬群發掘簡報」『北方文物』 2004-3  
瀋陽市文物工作組 1964 「瀋陽伯官屯漢魏墓葬」『考古』 1964-11  
大連市馬圈子漢魏晉墓地考古隊 1993 「遼寧瓦房店市馬圈子漢魏晉墓地發掘」『考古』 1993-1  
徐建華 2002 「大連市金州区董家溝東漢墓葬的清理」『考古』 2002-6  
劉俊勇 2002 「遼寧大連宮城子石板墓發掘簡報」『北方文物』 2002-2  
旅順博物館 1986 「遼寧大連前牧城駅東漢墓」『考古』 1986-5

〈英文〉

榎本杜人 1963 Han Tombs of Lo-lang -their studies by Japanese scholars-, Memoirs of the Research  
Department of the Toyo Bunko, No.21 (『楽浪墳墓-日本学者の業績-』『楽浪漢墓第二冊-石巖里二一九  
号墓發掘調査報告』楽浪漢墓刊行会, 1975年所収)

---

図版出典

図5-1: 有光・藤井 2003, 図5-2: 梅原考古資料 9547, 図5-3: 梅原考古資料 7395  
図6-1: 有光・藤井 2003, 図6-2: ユンソンハク 2004, 図6-3: キムヨンガンほか 1964, 図6-4: アンピョンチャ  
ン・ホンウォンピョ 1990, 図6-5: ハンインドク 2003, 図6-6: 榎本・野守 1933  
図7-1・5: 関野ほか 1925・1927, 図7-2・7: 『朝鮮遺跡遺物図鑑』編纂委員会 1989, 図7-3: 鄭仁盛 2005, 図7-4:  
梅原考古資料 7348, 図7-6: 李榮勳ほか 2001  
図9  
I・II a・III・II b・VI・VII・IX・X: 関野ほか 1925・1927, IV: 関野ほか 1915・1925・1927, VIII: 関野ほか 1925・  
1927・李榮勳ほか 2001  
図10-1～3・5～7: 関野ほか 1925・1927, 図10-4: 関野ほか 1915, 図10-8: 野守ほか 1935, 図10-9: 小泉・  
澤 1934, 図10-10: チャン Cholman 1994  
図11-1: 小場・榎本 1935, 図11-2・3: 関野ほか 1925・1927, 図11-4・5: 社会科学院考古学研究所 1983a, 図11-6:  
社会科学院考古学研究所田野工作队 1978, 図11-7: 野守ほか 1935  
図13-1・5: リスンジ 1990, 図13-2: 科学院考古学および民俗学研究所 1959a, 図13-3: 梅原考古資料 10073,  
図13-4: リスンジン・キムジェヨン 2002, 図13-6: 小場・榎本 1935  
図15-1・2: 許玉林 1993, 図15-3・7: 浜田ほか 1933, 図15-4: 劉俊勇 2002, 図15-5: 許明綱・呉青雲 1991,  
図15-6・10・12: 森ほか 1934, 図15-8: 旅順博物館 1986, 図15-9: 徐建華 2002, 図15-11: 大連市馬圈子漢魏  
晉墓地考古隊 1993  
図16-1～14: 許玉林 1993, 図16-15・25～29: 浜田ほか 1933, 図16-16～24: 許玉林 1993, 図16-30～35・  
37・38: 森ほか 1934, 図16-36: 徐建華 2002  
図17-1～3: 許玉林 1993, 図17-4・5・8～10: 浜田ほか 1933, 図17-6・7・19～21・25～27: 森ほか 1934,  
図17-11～13: 旅順博物館 1986, 図17-14・15: 許明綱・呉青雲 1991, 図17-16～18: 徐建華 2002, 図17-22  
～24: 大連市馬圈子漢魏晉墓地考古隊 1993

(埼玉大学教養学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2008年10月31日受理, 2008年12月5日審査終了)



---

## **A Re-examination of Brick Chamber Tombs in the Nangnang and Daebang Commanderies: A Study of the Classifications and Chronology of Brick Chamber Tombs and Issues**

TAKAKU Kenji

The author examined brick chamber tombs in the Nangnang and Daebang commanderies dispersed in the areas of Pyongyang and Hwanghae Province in the Democratic People's Republic of Korea by classifying types of tombs, creating a chronology, and studying their relationship with related burial systems, genealogies, and the background to their emergence and disappearance. As a result, the author was able to classify domed brick ceiling, single-brick chamber tombs, the predominant type of Nangnang brick chamber tomb, into four types, create a chronology and estimate their actual dates. The author then identified a chronological relationship between these tombs and other brick chamber tombs from the common relationships of the various attributes. Looking at this history of these changes, a considerable transformation took place during the period from the end of the 2nd century through to the beginning of the 3rd century when the 1BII-type domed brick ceiling single-brick chamber tomb became established. The author surmises that this occurred against the backdrop of the Gongsun clan's control of the Nangnang commandery and the clan's splitting of the commandery to create the Daebang commandery. As a result of making a comparative study of materials on Han burials in northeastern China, the author suggests that the archetypal domed brick ceiling brick chamber tomb has particularly strong ties to the Liaodong Peninsula.

The author suggests that tombs with bricks and wooden caskets were not a transitional burial system during the transition from tombs with wooden caskets to brick chamber tombs, but that elements of brick chamber tombs were introduced to wooden casket tombs. Based on this, the author posits that brick chamber tombs had already appeared in the period from the end of the 1st century to the beginning of the 2nd century when tombs with bricks and wooden caskets were built.

Both stone ceiling brick chamber tombs and stone chamber tombs were burial systems that were built at the same time as domed brick ceiling brick chamber tombs. Stone ceiling brick chamber tombs did not represent a transitional system that evolved during the change from brick ceiling brick chamber tombs to stone chamber tombs, but were built because the ceiling type used in stone chamber tombs was introduced to brick ceiling brick chamber tombs. The author then looked at the final stage and the period after the demise of the Nangnang and Daebang commanderies, about which details are unclear, by studying the distribution and inscriptions of domed ceiling brick chamber

---

tombs, stone ceiling brick chamber tombs and stone chamber tombs. The study showed that the commandery-district system underwent significant changes during the period from the middle of the 3rd century when the local ruling family moved from Pyongyang to the Hwanghae Province and were replaced in Pyongyang by the influx of a new ruling elite.

Keywords: Nangnang commandery, Daebang commandery, brick chamber tomb, stone chamber tomb